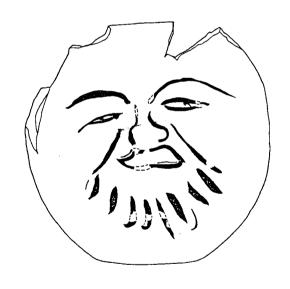
都市計画街路

七美·太閤山·高岡線内遺跡群

発掘調査概要(3)

南太閤山I遺跡



1985年3月 富山県教育委員会

都市計画街路

七美·太閤山·高岡線内遺跡群

発掘調査概要(3)

南太閤山I遺跡

1985年3月 富山県教育委員会

本県のほぼ中央に位置する小杉町南部の射水丘陵は、県下でも埋蔵文化財が最も集中する地域として知られております。

富山県教育委員会では、各種の開発事業に先だって、近年、これ らの埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。本書に収録し た南太閤山 I 遺跡もそのひとつです。

その結果、これまで推測の域を出ることのなかった祖先の歩みが 遺跡を通して具体的に明らかになりつつあります。とりわけ、この 南太閤山 I 遺跡では、北陸地方では初めて人面墨書土器が出土し、 この地で行われた古代祭祀の一端を物語る貴重な資料として、すで に斯界の注目を浴びております。

こうした調査の成果をまとめた本書が、今後の文化財保護と古代 史研究の一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査の実施に当たり、ご協力いただいた地元の方々 をはじめ、関係各位に厚くお礼申し上げます。

昭和60年3月

富山県教育委員会 教育長 國 香 正 道

例 言

- 1. 本書は、都市計画街路七美・太閤山・高岡線建設に伴う南太閤山 I 遺跡 A 地区の発掘調査概報である。
- 2. 発掘調査は、富山県土木部(都市計画課)の依頼を受けて、富山県教育委員会(富山県埋蔵文化財センター)が 実施した。
- 3. 調査は、富山県埋蔵文化センター主任岸本雅敏・文化財保護主事 関 清・同山本正敏が担当した。
- 4. 調査事務局は富山県埋蔵文化財センターに置き、主任出村昭夫・文化財保護主事池野正男・酒井重洋が担当し、 所長前田英雄が総括した。
- 6. 出土遺物の観察と評価にあたって、木製品については国学院大学教授乙益重隆氏、人面墨書土器については奈良 大学教授水野正好氏、国立歴史民俗博物館教授吉岡康暢氏から有益な教示をえた。記して感謝の意を表します。
- 7. 出土種子の同定については、富山大学教養部の吉井亮一氏の協力を得、吉井氏にはその同定結果の報文をいただき本書に収録した。記して感謝の意を表します。

また、花粉分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に依託した。同社研究員橋本真紀夫氏には、その結果報告をまとめていただき本書に収録した。

- 8. 遺物写真の番号は、実測図の番号に対応する。
- 9. 本書の編集・執筆は、岸本雅敏・関 清・山本正敏が担当し、その執筆分担は各文末に記した。

目 次

I	月	7	章	•••	•••••	•••••	• • • • •	•••••		• • • • •	• • • • •	••••	•••••	• • • • •	••••	• • • • •	• • • • •	•••••	••••	• • • • • •	•••••	·· 1
	1					境…																
	2	遺跔			-	位…																
	(1					•••••																
	(2					出土																
	3					•••••																
	(1					既往																
	(2)	骨査の	方	法と	経過	•••••	• • • • •	•••••	• • • • • •	• • • • •	•••••	•••••	••••	•••••	• • • • • •	••••	•••••	•••••	• • • • • •	•••••	5
Π	追	曹	構	•••	• • • • •		•••••	· • • • •	•••••	•••••	· • • • •	••••	•••••	• • • •	•••••	• • • • •	••••	•••••	••••	•••••	•••••	6
	1	Ш	跡…	••••	• • • • •			· • • • • •		• • • • • •		••••		••••		• • • • • •	••••	•••••		• • • • • •		6
	2	橋壮	犬遺構	‡ •	杭列	•••••	•••••	· • • • •		• • • • •	• • • • • •	••••	•••••	••••	•••••	• • • • • •	••••		•••••	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	9
Ш	追	甚	物	•••	• • • • •	•••••	•••••	•••••	• • • • • •	• • • • • •	• • • • •	••••	•••••	••••	••••	• • • • •	••••	•••••	••••	•••••	•••••	11
	1	縄戈	て時代	÷	• • • • • •			· • • • • •		• • • • • •	• • • • •	••••	•••••	••••		• • • • • •	••••		••••	• • • • •	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	11
	2			-		•••••																
	3					•••••																
	4					•••••																
	5	<i>₹0</i>)他の	遺	物…	•••••	• • • • •	· • • • •		• • • • •	• • • • •	••••	•••••	••••		• • • • •	••••	•••••	•••••	• • • • •	•••••	35
IV) J	と	: め	•••	•••••	•••••	•••••	· • • • •	•••••	•••••	• • • • •	••••	••••	• • • • •	•••••	• • • • • •	••••	•••••	••••	•••••	•••••	··36
	1	川跔	いの形	/成	と埋	没…	• • • • •	· • • • • •		• • • • • •		••••	• • • • • •	••••		• • • • •	• • • • •	•••••	••••	• • • • • •	• • • • • •	36
	2	木製	以祭祀	具	につ	いて	• • • • •	• • • • •		• • • • •	• • • • •	••••	•••••	••••	• • • • • •	• • • • •	• • • • •	•••••	•••••	• • • • • •	• • • • • •	37
	3	人面	事墨面	土	器に	つい	て…	• • • • •	•••••	• • • • •	• • • • •	••••	•••••	••••		• • • • •	• • • • •	•••••	•••••	•••••	•••••	··39
/ 1. 4 15			ə.l.ı8	I - 1 -	98.1	, (, T	`#. n-k-	·	Halat Y	ጚ ቆሎ												40
付載						ШI																
	2	Ē	出界	(判	众 阁	ШI	退跡	上山。	_00利	里天	退件		•••••	• • • • •	•••••	• • • • • •	••••	•••••	•••••	•••••	•••••	••47
参考	• 弓	用対	て献・・	••••	• • • • •	•••••	•••••	· • • • •	•••••	• • • • •	· • • • • •	••••	•••••	• • • • •	•••••	• • • • •	• • • • •	•••••	•••••	•••••	•••••	··41

挿 図 目 次

第1図遺跡の位置と周辺の遺跡第14図土器実測図第2図SD01断面図第15図土器実測図第3図調査区と区割図第16図土器実測図

第4図 遺構全体図第17図 土器・土製品実測図第5図 橋状遺構・杭列実測図第18図 人面墨書土器実測図

第6図 石器実測図 第19図 木製品実測図

第7図土器拓影・実測図第20図木製品実測図第8図土器実測図第21図木製品実測図

 第9図 土器実測図
 第22図 木製品実測図

 第10図 土器実測図
 第23図 木製品実測図

第11図 土器実測図 第24図 土器実測図

第12図 土器実測図 第25図 土器拓影・実測図

第13図 玉類・有孔円板実測図 第26図 人面墨書土器と土師器甕

図 版 目 次

図版 1 遺跡全影 図版 11 古墳時代の遺物 図版 2 土層セクションと遺物出土状況 図版 12 奈良時代の遺物 図版 3 橋状遺構 図版 13 奈良時代の遺物 図版 4 SD04遺物出土状況 図版 14 奈良時代の遺物 図版 5 SD04遺物出土状況 図版 15 奈良時代の遺物 図版 6 縄文時代の遺物 図版 6 縄文時代の遺物

図版7古墳時代の遺物図版17木製品図版8古墳時代の遺物図版18木製品図版9古墳時代の遺物図版19木製品

図版10 古墳時代の遺物

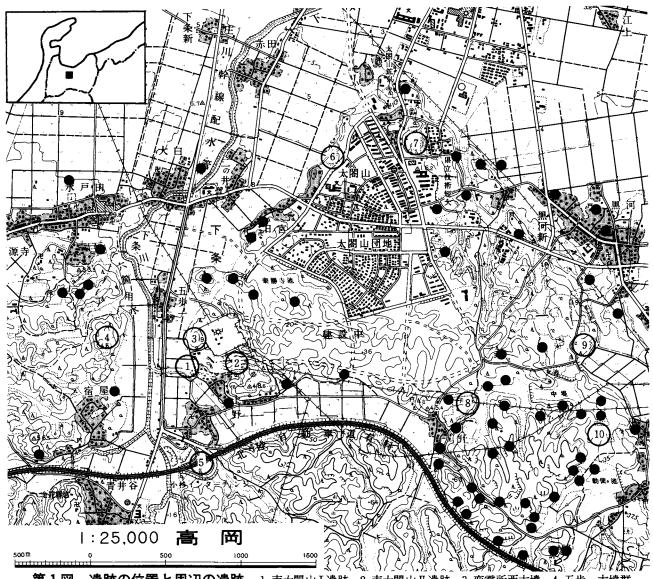
表 目 次

表 1 年度別調査一覧 表 2 木製品内訳

I 序 章

1 遺跡の位置と環境

富山県は三方を山で囲まれ、一方は日本海となる。南東に連なる北アルプスの山々は、険阻で天然の屛風にもたとえられている。したがって県東部の地勢は、急峻な斜面から一気に日本海へ下る様相を呈している。これに対し県西部は、なだらかな山が多く、ゆるやかに傾斜し、広大な平野部を作る。この平野部につき出すように低い丘陵が北へ延びる。これが射水丘陵・呉羽丘陵と呼ばれるもので、古くから県を二分し、文化のあり方にも微妙に関与しているものである。南太閤山 I 遺跡はこの射水丘陵が平野部と接するところに立地している。行政区名では射水郡小杉町南太閤山19丁目及び下条字笹山となる。射水丘陵を形成する地層等については、『小杉町史』前編に詳しく、丘陵上部は第四系洪積層の日宮互層と太閤山火砕質層から形成されるという[木倉編1958]。日宮互層の粘土は、良質で現在でも小杉焼や瓦の原料として利用されている。また、当地域は最近まで山林原野となっており、古代手工業生産に必要な燃料・水・粘土等の供給態勢を備えていたと言える。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 1.南太閤山Ⅰ遺跡, 2.南太閤山Ⅱ遺跡, 3.変電所西古墳, 4.五歩一古墳群, 5.上野遺跡, 6.囲山遺跡, 7.中山南遺跡, 8.上野赤坂A遺跡, 9.東山Ⅱ遺跡, 10.石太郎C遺跡,

当地域では、旧石器時代から現代に至るまで連綿と人間の営みを見ることができる。とりわけ、須恵器生産遺跡や 鉄生産遺跡が多いのは、恵まれた自然環境が一つの要因であったと言うことができる。周辺の遺跡を概観すると、弥 生時代から古墳時代の集落跡として知られる上野遺跡・中山南遺跡があり、この時期の墓群として、囲山遺跡や五歩 一古墳群などがある。また、南太閤山Ⅰ遺跡の北側に位置する変電所西古墳は、最近になって前方後方墳の可能性が 指摘されており、本県における古墳発生の手がかりを得るための重要な地域と言える。丘陵のやや奥に入った所では、 奈良時代から平安時代にわたる製鉄遺跡が多く、上野赤坂A遺跡や石太郎C遺跡では製鉄炉が発見され、古代の製鉄 遺跡の研究に好資料を提供している。なお、隣接する南太閤山Ⅱ遺跡も製鉄遺跡である。

射水丘陵の中央部を流れる下条川左岸には、小杉流通業務団地(以下流団と呼ぶ)造成に伴い、数多くの須恵器窯 や古墳などが発見、調査されている。とりわけ流団No21遺跡では、7世紀代の瓦陶兼業窯が発見され、瓦の供給先も 究明されたことから、斯界の注目を浴びている。この流団地内でも製鉄遺跡が発見されているが、右岸の太閤山地域 と比べてその規模と時代などに若干の違いが見られる。また、墳墓についても弥生時代に溯るものは流団内では発見 されておらず、射水丘陵を二分する下条川が古代文化のあり方に微妙に関与したと考えられる。 清)

遺跡の立地と層位

(1) 立

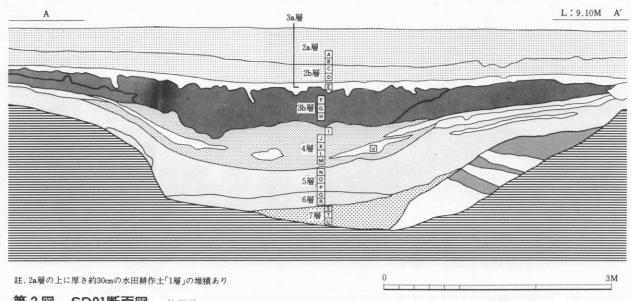
南太閤山 I 遺跡は北陸自動車道小杉インターチェンジの北方約500m、下条川右岸の丘陵上から西側の谷平野中に立 地する。丘陵の頂部(B地区)では、昭和58年度の調査で弥生時代終末期の方形周溝墓群が検出されている。

今回調査の対象としたA地区は、丘陵の西側裾から上野集落の一部を含む水田地帯に立地する(第2図)。調査区東 端の山裾では標高約10m、他方、140mへだてた西端では標高約9mで、西方に向かってゆるやかに傾斜している。 狭隘な谷平野の中ほどを北流する下条川までの距離はわずか200m 足らずである。

(2) 層位と遺物の出土状況

耕作土(1層)の直下によくしまった淡黄色のシルト質土層がみられ、これが遺構(川跡)形成面つまり「地山」 となっている。地点によっては、1層と地山との間に開田に伴う二次堆積土がみられる。

調査区の西端に近いX1・2Y8区の堆積から川跡SD01の基本層序を示すと以下のとおりである(第2図)。



第2図 SD01断面図

- 2層;微粒の砂質土(シルト質)。色調の違いから淡黄灰色の上層(2a層)と淡黄褐色の下層(2b層)に細分できる。2b層の下面近くから主として奈良時代の土師器・須恵器が出土し、さらに古墳時代中期の土師器、後期の土師器・須恵器も含まれる。
- 3層;粘質土。上面は暗灰褐色で上層の2b層との漸移層として区分しうる(3a層)。古墳時代中期の土師器、古墳時代後期・奈良時代の遺物包含層。

下層 (3 b 層) は暗茶褐色の有機質土で、葉・種子・茎・根などの植物遺体を多く含む。3 b 層の上面には、第 4 図に示したとおり自然木がほぼ同一面に密集して堆積していた。3 b 層の上半部は須恵器を伴わない古墳時代中期の土師器包含層である。

- 4層;暗褐色砂質粘性土。微粒の砂と粘土が細かな互層をなし、断面では縞状となる。⑨など部分的に植物遺体を 多量に含む間層がレンズ状に入る。水性堆積層。無遺物層。
- 5層;暗褐色の微粒砂混じり粘質土。3層に近い。3層に比べて微粒の砂が多く明るい。無遺物層。
- 6層;暗茶灰褐色の微粒砂混じり粘質土。砂の薄い堆積がレンズ状に入る。水性堆積層。無遺物層。
- 7層;茶灰色の砂質粘性土。黄灰色の微粒砂がレンズ状に入る。最下層では砂利層となり、細かな木片と植物遺体を含む。4層と基本的に同質で、水性の堆積であることを示す。最下層の砂利層つまり川底から縄文時代前期・後晩期の土器、弥生時代終末期の土器片が少量出土した。

なお、川跡形成面の「地山」の堆積状況について簡単にふれておく。X3Y13区に南北のトレンチを設け、標高8.8mの川跡形成面から約3m掘り下げた最下層(標高5.7m)で縄文時代前期の良好な遺物包含層を確認した。この包含層から上面までは水性の自然堆積層で、遺物を含まない。その間の堆積土は大きく9層にわかれる。1層は黄灰色のよくしまったシルト。2層は黄灰色の微粒砂層で縞状に堆積する。3層は植物遺体を含む砂混じり粘質土。4~7層は植物遺体を多く含む茶褐色ないし黒褐色の粘性泥質土。8~9層は有機質を含む粘土層。

3 調査の経緯

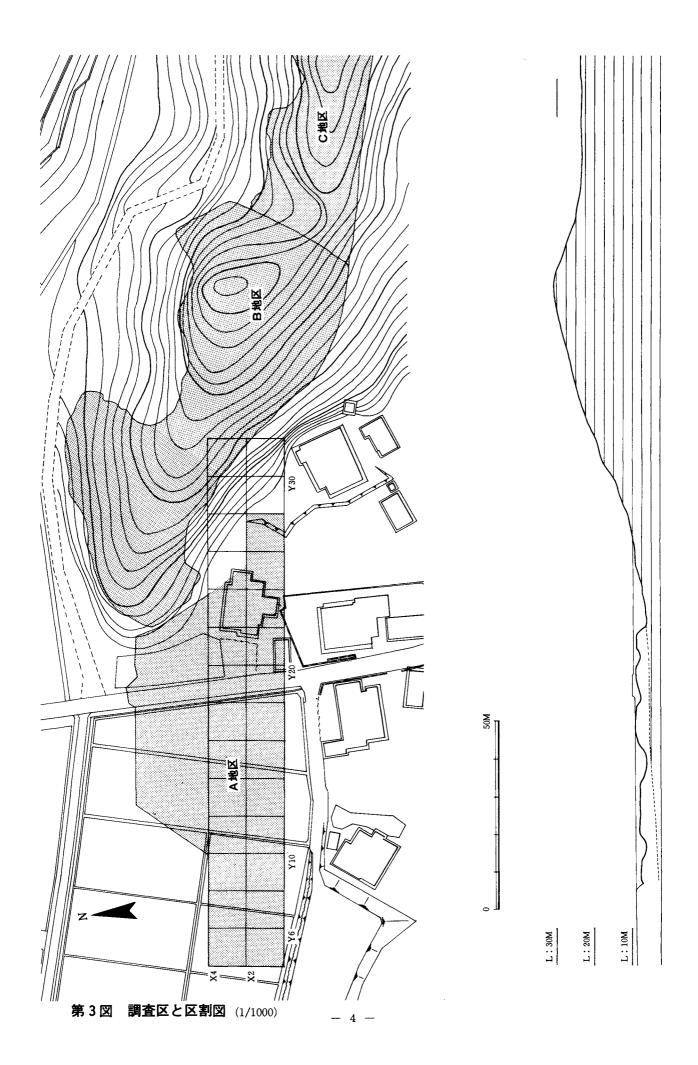
(1) 調査の契機と既往の調査

富山県は昭和48年に富山新港臨海工業団地の分譲、太閤山住宅団地の造成及び小杉流団の建設計画の進展に伴う交通量の増加に対処する目的で、新湊市七美から小杉町太閤山を経て高岡市西広上を結ぶ都市計画街路七美・太閤山・高岡線の建設を決定した。

昭和51年12月、富山県教育委員会(以下県教委と呼ぶ)は、正事が具体化した大門町西広上から小杉町黒河にいたる約8kmの区間について、土木部の依頼により分布調査を実施した。その結果、道路建設計画地内に18か所の新たな遺跡を発見し、従来から知られていた大門町布目沢遺跡を加えて19遺跡の存在が明らかになった。

この結果にもとづき、県土木部、県教委そして大門・小杉の両町教育委員会の四者が協議を重ねた結果、大門町に係る7遺跡のうち5遺跡を大門町教育委員会が発掘調査を実施することとし、昭和55年に生源寺遺跡、56年には小泉遺跡が同町により記録保存調査された。また、流団内に所在する4遺跡については、県教委が流団造成工事に伴うものとして、記録保存調査を実施した。

都市計画街路七美・太閤山・高岡線に係る事業として調査の対象となったのは10遺跡で、昭和54年から59年まで6次にわたる記録保存調査を実施した。これらの概要は表1に示したとおりであるが、南太閤山 I 遺跡は昭和58年の置県百周年事業に関連し、片側車線の供用開始の方針が打ち出されたため、遺跡をA・B・Cの三地区に分割して調査を実施した。また、南太閤山 II 遺跡では、奈良時代と平安時代の製鉄遺構が検出され、県土木部の協力を得て、工区内に現状保存されることになった。



(2) 調査の方法と経過

南太閤山 I 遺跡は、丘陵部に立地する弥生後期の墓群と西側に広がる古代河道からなる。前述のように昭和58年が 置県百年にあたり、その行事の一つである新世紀博覧会が当該道路の東方、約1kmに位置する県民公園太閤山ランド で実施されることになり、58年の片側車線供用開始の方針が強く打ち出された。このため調査は、第3図に示すよう にA・B・Cの三地区に分割して実施することになった。今回の調査は、A地区の南側部分にあたる。

調査は昭和57年度に実施した北側部分との関連に重点をおき、区割も57年度のそれにならった。区割りは5 m グリッドを基本とし、土層観察用ベルトを10m 間隔に残し、東西のそれは、調査区全体を貫ぬくものとなった。

発掘は宅地造成や町道建設時の客土を重機で除去し、西側から順を追って東側へと実施した。調査開始日はおだやかな日和の5月7日であった。20~30cmの旧表土を取り除き、5月下旬にはY10区までの表土排土を完了し、大溝のプランを確認するに至った。大溝には自然木が累々と堆積し、多量の木製品の出土が予想された。自然木の取り上げは、土器と同様に図化し、洗浄の後、サンプルの木片を採取した。また、この頃に、子持勾玉や有孔円板などの古墳時代祭祀遺物が発見され、間を置かずして、斎串なども発見された。下層に掘り進むにつれ、土器も矛盾なく古くなり、層位関係も概ね確認できた。花粉分析のための土壌サンプル採取を行なったのもこの時期である。大溝はその覆土の観察により、川跡と認められた。

さらに西側に発掘が進んだ7月10日、SD03から人面墨書土器が出土した。その翌日には、さらにもう一点の人面土器を検出した。人面墨書土器の出土は、北陸地方では初例となった。7月中旬にはSD04の掘り下げを行ない、多量の木製品を検出した。木製品は、盤・糯・刀形木製品・建築部材など多種多様であり、伴出した土器から、古墳時代後期と奈良時代後半に属すると考えられる。SD04は、その覆土の状況から河跡湖や沼沢地と考えられ、これら木製品の多くは、自然木などの状況から推して、洪水などによりSD04に押し流され、堆積したものと考えられる。

橋状遺構はこのSD04の南端で検出した。最初はしがらみの木列と考えていたが、自然木を取り除いた段階で橋状の遺構と判断した。

8月下旬には、調査区東端すなわち丘陵の裾部に達し、ここで平安時代の細い溝SD05を検出した。以後、遺構の 図化、写真撮影を実施し、当初目的とした、川跡の調査をひとまず完了した。

当遺跡は川跡や沼沢地であり、いわゆる自然現象が大きく作用した地区と考えられた。したがって最後に、それらの形成過程を知る目的で、数か所に深いトレンチを設けた。その結果、SD01の底面よりさらに2m下に良好な縄文時代前期の包含層を確認した。現地表面からの深さは5mに達する。この遺物包含層の取り扱いについては、現在も協議中である。全ての調査を完了したのは9月6日であった。 (関 清)

年度	遺	跡	名		種	類	時 代	発見された遺構	備考
54	高山	I	遺	跡	集落・	製炭	先土器・縄文・奈良・平安	炭焼窯 2・溝 2・穴10	
55	東 山	I	遺	跡	製	鉄	奈 良?	製鉄炉1・穴1	
56	表 野	:	遺	跡	集落·	製炭	先土器・古墳・奈良	住居跡 2・炭焼窯 2・溝 1・穴 7	
56	南太閤山	□Ⅱ遺	跡A	地区	製	炭	縄文・奈良	炭焼窯2・穴4	
	東山	П	遺	跡	製	炭	縄文・奈良	炭焼窯 2	
57	南太閤山	I 遺跡	A·Β	地区	集落·	墓跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	方形周溝墓4・土坂墓5・住居跡1他	
	南太閤山	』 』 遺	跡 B	地区	製鉄·	製炭	縄文・古墳・奈良・平安	製鉄炉2・炭焼窯1・穴5	現状保存
F0	南太閤山	II 遺	跡C:	地区	集落·	墓跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	方形台状(周溝)墓4・住居跡2他	
58	南太閤山	□遺	跡C	地区	集落·	製炭	縄文・奈良	住居跡1・炭焼窯1・穴3	
59	南太閤山	II 遺	跡A	地区	Ш	跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	川跡・橋状遺構	

表 1 年度別調査一覧

Ⅱ 遺 構

1 川 跡 (第4図)

時代幅をもつ川跡と溝を検出した。流路の重複する箇所も一部みられるが、以下、SD01~SD05とする。

(1) SD01

調査区の西端近くをU字形に蛇行する旧河道である。調査区北端のX4Y12・13区から南西にのび、X1・2Y9区で蛇行して北西のX4Y6区に至る。川幅は約7m、深さは約2mある。川跡内での土層の堆積状況については前章の「層位」の項で述べたとおりである。川底のレベルが西に向かってしだいに低くなっていることから、水流の方向は南西→北西と考えられる。そして、上流つまりX4Y12・13区の北側は、昭和57年度調査で検出された旧河道につながる。

なお、このSD01と重複してX3Y12区からX1Y9区にかけてSD02が切っている。

(2) SD02

SD01と重複してX3Y12区からX1Y9区へ南西方向にのびる溝である。古墳時代後期と奈良時代の土器を含む。SD01内の東寄りを流れ、東側の肩はSD01のそれと重複する。 $X2Y11\cdot12$ 区で東西の土層断面をみると、SD01の3b層をえぐるように上層に形成されている。川幅は約6m、深さ約80cmである。第2図に示したSD01の3a層はこの流路に該当すると考えられる。水流の方向は、SD01と同様、南西にのびたのち $X1Y8\cdot9$ 区で蛇行してさらに北西に至る。 $X3\cdot4Y5$ 区の平坦地で検出された砂混じりの奈良時代土器包含層は、SD01と並行して北西にのびており、その流路の一部とみることができる。なお、X1Y9区にみられる幅約60cmの細い溝(第4図)はSD02の川底の一部である。

(3) SD03

調査区の東寄りのX1~4Y17区を南北にのびる浅い溝である。幅約5 m、深さ70cmで、溝の西肩から7 世紀初頭の須恵器が、覆土中から奈良・平安時代の須恵器・土師器が出土した。X2・3 Y17区では2 点の人面墨書土器が出土している。水流の方向は、調査区北端のX4 Y17区から南流し、X1 Y17区で西に強く蛇行してX1 Y16区から北西に流れる。そしてX3 Y13区で旧河道S D01内の中層に流れこみ、その東側の肩にそって南西に流れてS D02となる。なお、X1 X16・17区は南側の未調査区にも流路がのびていると考えられることから、人面墨書土器の出土したS D03と未確認の南側流路との合流点とみることもできよう。

(4) SD04

調査区の東側に近い山裾に形成されたほぼ南北にのびる旧河道である。西の肩はY19区、東の肩は調査区南端でY21区、北端でY20区である。最大幅約7mをはかり、東側の肩は南西から張り出した山裾の自然地形に規定されて、北西方向にのびている。堆積状況はSD01にもっとも近いが、異なるところは、東側の山裾部分の最下層に縄文時代前・晩期の土器包含層(黒色泥質土)が認められたことである。

SD04内の南端、X 1 Y 19・20区では、川跡に東西に架せられた奈良時代の橋状遺構が上層から検出された。その層位はSD01の3a層にほぼ対応し、3b層に対応する橋状遺構の土層は、植物遺体を多く含む茶褐色泥土である。橋状遺構の形成時には、その下層は泥土の堆積によって川跡はほぼ埋没し、滞流性の淀みないしぬかるみ状態であったことを示す。後述するとおり、橋状遺構は自然の丸太を横に並べた「渡り場」的な施設で「橋」に近い機能を有していたと推定される。



橋状遺構とほぼ同一面で、その北西一帯から完形ないし完形に近い須恵器の杯が約20点散乱して出土した(図版4の2)。また、橋状遺構の下層の「3 b 層」から、橋状遺構に北接する X 2 Y 19区で古墳時代後期の木製品が出土した(図版4の3)。同じく「3 b 層」から、北端の X 4 Y 19区で古墳時代後期の土師器が出土した。「3 b 層」の下層以下は無遺物層で、S D 01の4層~6層にほぼ対応し、川底に至って縄文時代前期~晩期の土器片・石器が少量出土する。なお、水の流れは、山裾の自然地形にそって南西から北西方向に進み、北端は昭和57年度に検出された旧河道に達する。そして57年度調査区内で S D 01の上流に合流する。

(5) SD05

調査区東端のX1Y26区からX2Y24区にかけて自然地形にそって山裾を北西方向にのびる細い溝である。幅約50 cm、深さ約30cmである。溝の覆土から平安時代中期の糸切り底の土師器の杯が出土した。 (岸本雅敏)

2 橋状遺構・杭列

(1) 橋 状 遺 構 (第5図)

SD04の南端で検出した。南側の一部が未掘であるのと、最近の攪乱により全容を知ることができないが、SD04の両端場を渡るように丸太材が整然と並べてある。そしてその両側には、杭が打ち込まれ、橋状を呈する。しかし、構造と溝内の堆積土の状況などから、一般的に言われる橋の概念とは異質の感があり、あえて橋状遺構と呼んだ。なお、遺構の説明にあたって、部材の名称等については、橋のそれに準じた。

橋状遺構の構築過程を復原的に見ると、まず、SD04の両端場に渡る桁木に相当する丸太を一本架す。それは残存で7mにも及ぶ。次に3m前後の丸太材を敷き並べ、その両端に割り材の杭を打ち込む。杭は敷き並べた丸太よりやや頭部が出るように打ち、それに接するように、丸太材が残る。この丸太材は、北側に1本のみで、残存長2.8mを測り、対する南側にも存在していたのか、あるいは欄干状に脚柱(杭)に結束されていたものかは不明である。ただし、このような順序で丸太材を組み、最終的には7×3m程の長方形のプランを持つ橋状遺構が築かれたものと推察される。そして、それはSD04を十分に渡りきるものであったと考えられる。

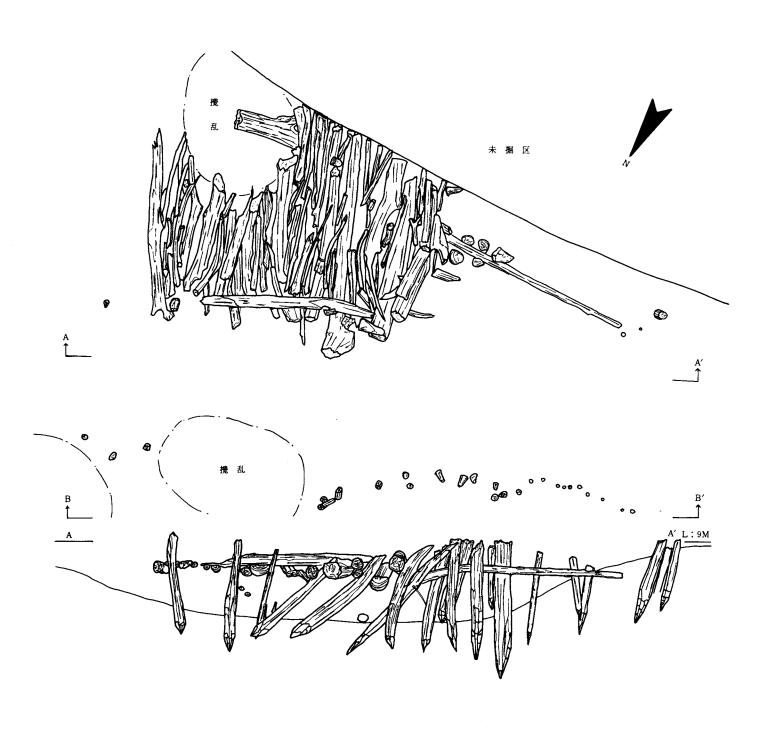
ところで、この橋状遺構は次の根拠から流水のある溝に架せられたのではなく、沼沢地的なぬかるみに架せられた橋と考える。つまり、構造的な面からは、脚柱間が狭いこと、そして脚柱が細く、桁上部を支え得るものではないことが上げられる。そして、SD04の覆土、すなわち当遺構下の土壌は、おだやかな堆積状況を示し、多くの有機物を含む茶褐色腐泥である。付章で吉井亮一氏が述べられるように、この土壌には、挺水性のヒルムシロが見られたり、外果皮を残すオニグルミやトチなどの種実遺体がある。これらの外果皮は、流水状態の中では残りにくく沼沢地や河跡湖などに限られるという。

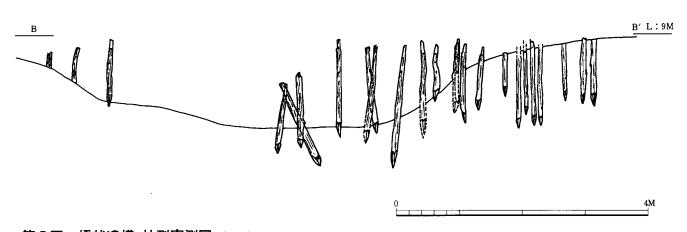
橋状遺構の構築時期については、敷き並べた丸太の間から多量の須恵器が出土しており、その年代は8世紀後半のものである。したがって、橋状遺構はこの時期に比定される。

(2) 杭 列 (第5図)

橋状遺構の約1m北側に、橋状遺構に平行する杭列が見られる。一部攪乱により失うが、径10cm前後の丸太杭をかなり密な間隔で打ち込む。杭の先端は、概ね水平となり、SD04の地山となる西側では、深く打ち込まれる。それとは逆にSD04の中央部では地山にわずかに達しているだけのものが多く、SD04とは無関係に打ち込まれたと考えられるものである。

杭列の西側延長上には浅い溝が続き、杭列との関連性を窺わせる。この溝からは、珠洲焼の小片が出土しており、 杭列も珠洲焼以後の造作である可能性が強い。したがって、橋状遺構との関連性はなく、むしろ橋状遺構が埋没して から打ち込まれたものと考えられる。 (関 清)





Ⅲ 遺 物

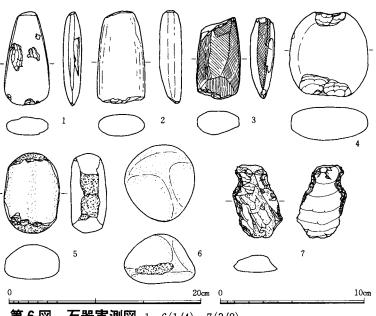
縄文時代 1

縄文時代の遺物には土器と石器がある。川跡の最下層から出土するものが多いが、奈良・平安時代の遺物に混じって 上層からも一部出土している。

(1) 縄 文 土 器 (第7図)

1は口縁部に縦方向の粘土紐を貼り付け、この間に縄文原体を押圧したもの。2も同様で、横方向と、短く縦に原 体の端部を押圧する。3は口縁端部外側に荒い抉りを施している。4は連続爪形文をめぐらす。5は波状の突帯を貼 り付けて、縦方向の連続刻みを加えるもので、東海地方の入海Ⅱ式に類似しよう。 6 は小型の壺で、外面には細かな 連続刺突、底面にも連続爪形文が密に施される。7・8は同一個体。胴上半部でややくびれる器形で、くびれ部に一 条の爪形文をめぐらせて、上部に半截竹管によるコンパス文、下部に縄文を施文する。9は斜縄文の上に幅広の沈線 を斜めに引いている。10は鋸歯状沈線を2条めぐらす。11は半截竹管文を口縁部に平行に引き、小破状口縁の波頂部 には、半截竹管文端部をコンパス状に回転させた円形文を施文する。12は無文地に斜方向の沈線を、13は斜縄文を施 文する。14~17は羽状縄文である。17は口唇部に縄文を押圧する。

18~20は同一個体。器形は円筒状の平縁深鉢で、口縁端部がわずかに外方へ開く。胴上半部から口縁部にかけて5 条の沈線を引き、やや広くとった2区画に斜縄文を充塡する。口縁部と幅の狭い2区画は磨り消して一部に縦方向の 短い沈線を引く(20)。胴下半には、上半部とは異方向の斜縄文が施文される。21は口縁部がやや内湾する器形で、渦 巻状沈線と平行沈線がみられる。22はやや外方へ開く波状口縁の深鉢で、口縁直下に2条の沈線がめぐる。24は口縁 部が内傾し、三叉文と細かな充填縄文がみられる。25は口唇部にサンゴ状突起を有する浅鉢形土器である。一部に丹 塗の痕跡が残る。内外面とも丁寧な磨きが施される。26は口縁部が短く立つ壺形土器である。口唇部には斜めの刻み を入れ、頸部に2条の沈線をめぐらせる。27は羊歯状文と横方向の細かな条痕がみられる。30は口縁部が外反する鉢 形土器。器壁は非常に薄く、焼成は良い、胴部には半肉彫の低平な隆帯がめぐり、4か所に中央が窪む菱形の突起を 貼り付ける。1~17の土器は、5が早期末と考えられる他は、前期前葉に位置づけて良いだろう。18~20は後期中葉

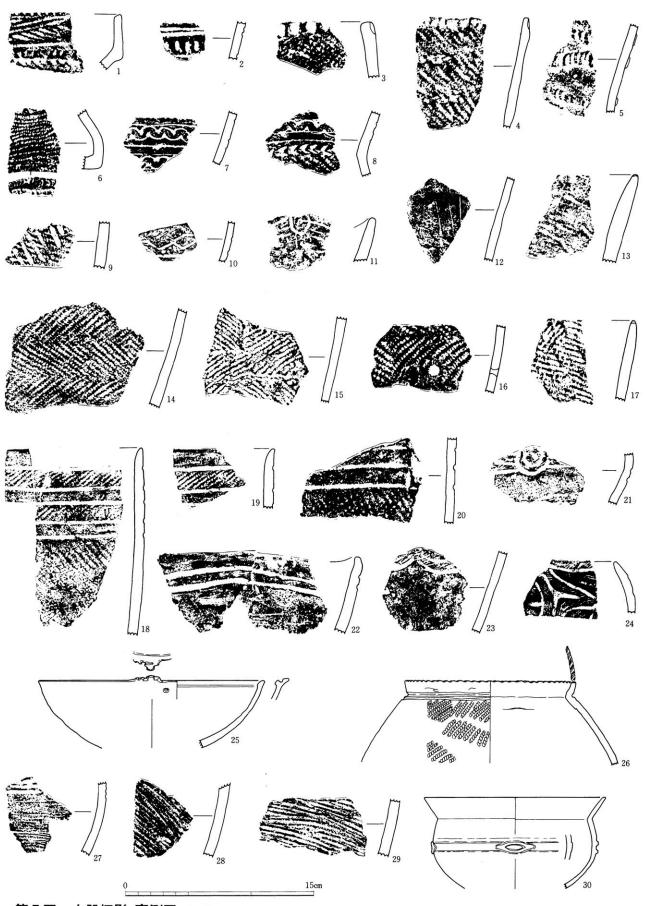


第6図 石器実測図 1~6(1/4), 7(3/8)

である。24~30は晩期前葉で、24は御経塚式、 25~30は中屋式に比定できる。

(2) 石 器 (第6図)

1は砂岩製の磨製石斧。2は表面風化し、石 質も不明。刃部は破損が著しく、やや片刃にな るところから再成したものと思われる。3は蛇 紋岩製の磨製石斧で基部を欠損する。 4 は花崗 岩製の打ち欠き石錘。重量は413gの大型のも ので、前期前葉に属すると考えられる。5・6 は叩き石で、潰滅痕が縁辺の全周にみられるも のと一部のみのものがある。7は鉄石英を用い、 簡単なつまみを作り出した石匙である。加工状 態からみて未成品かもしれない。(山本正敏)



第7図 土器拓影·実測図 (1/3)

2 古墳時代

古墳時代の遺物には、土師器・須恵器・玉類・木製品がある。そのうち土師器がもっとも多く、その大部分はSD01内の3b層から出土した。SD01内では、調査区の西寄りのX1・2Y7・8区とX2・3Y12区との2ブロックから集中して出土した。なお、少量みられる弥生時代終末期の土器についても、この節であわせてとりあげる。

(1) 土 師 器 (第8~10図)

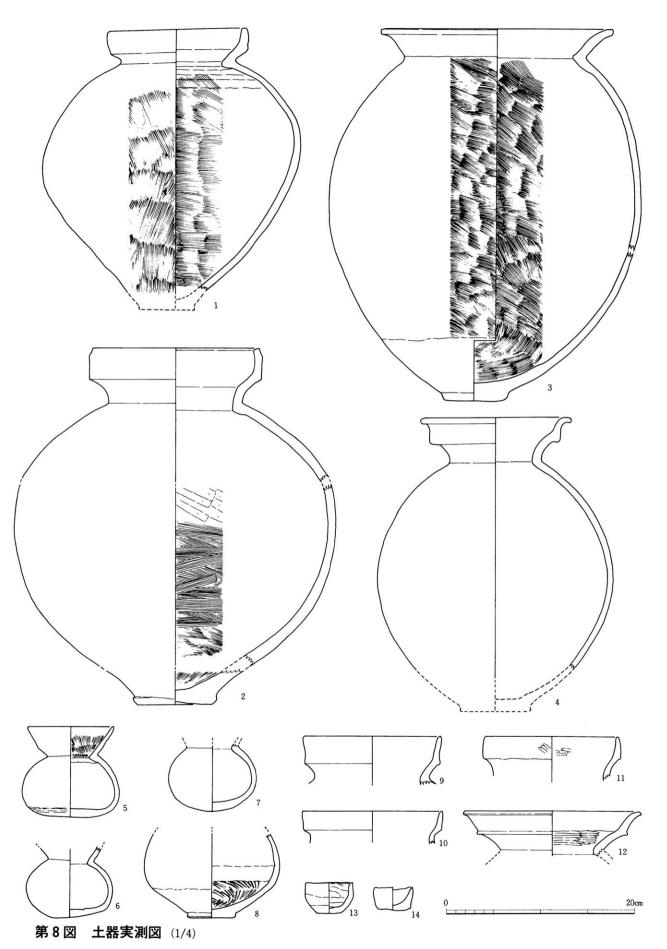
器種には壺・甕・高杯・椀・鉢・手づくね土器がある。これらの器種は、昭和57年度調査時の出土遺物にすべてみられるものである。また型式的にもそれと同じものが多い。器種別にみると高杯の占める率の高いことが注目される。 壺(第8図) $A\sim G$ の7種にわけられる。壺Aは有段口縁をもち、口縁部は頸部から外反し上段がほぼ直立する $(1\cdot 2\cdot 9\sim 11)$ 。細部においては、口縁が直立する $1\cdot 2\cdot 9\sim 11$)。細部においては、口縁が直立する $1\cdot 2\cdot 9\sim 11$)。細部においては、口縁が直立する $1\cdot 2\cdot 11\cdot 2\cdot 1$

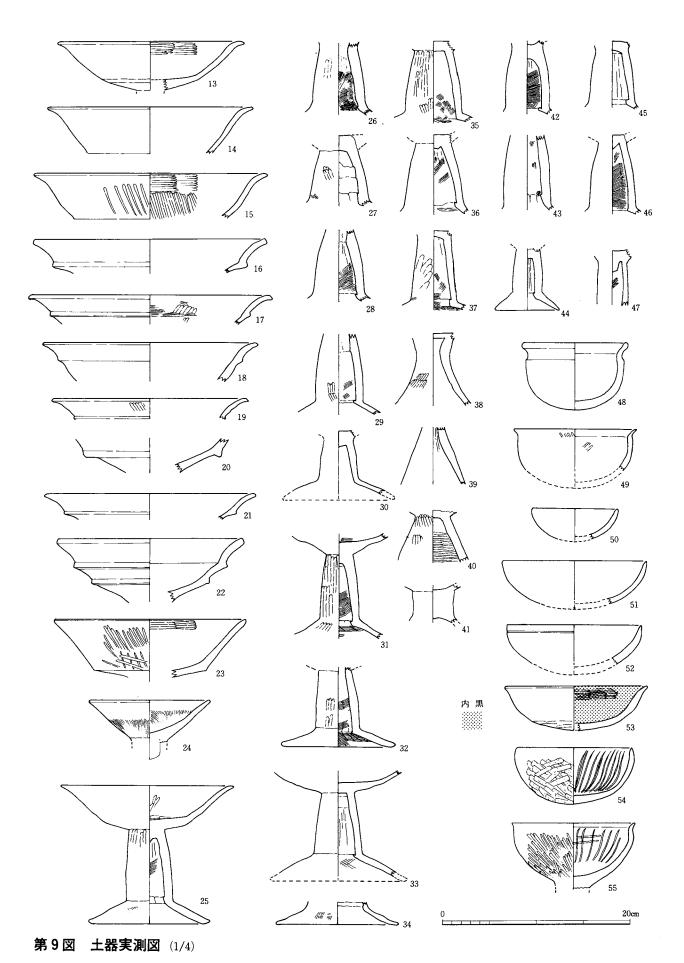
壺Bは有段口縁をもち、直立に近い口縁部上段の端部が強く外反する(4)。口径16cm、推定器高約31cmで胴部は玉子形に近い。X2Y11区出土。壺Cは頸部からくの字形に強く外反する口縁部をもつ(3)。口径24.6cm、器高39cmで、底部は平底である。内外面をていねいにハケメ調整する。X1Y8区2b層出土。壺Dは有段口縁をもち、頸部から強く外反して、上段もさらに外反する(12)。段は凸帯状の段となる。口縁部の内面下半を横方向にヘラミガキする。口径は18.8cm。X2Y6区3層出土。壺Eはいわゆる小型丸底坩と称されるものである(5~7)。完形の5は口径9cm器高9.6cmである。口縁部の内面をハケメ調整する。出土区は、5;X1Y11、6;X1Y15、X1Y9区である。壺Fは壺の胴部下半が遺存する(8)。内底面とその上部をハケメ調整する。壺Gは手づくね土器を一括した。13は口径5cm、器高3.4cmで外面に粘土紐の接合痕を、内面には指ナデ痕をとどめる。13はX1Y9区3a層出土。14はX3Y1区出土。

高杯(第9図13~47)。出土した内、全器形を窺いうるものは少ない。以下、杯部と脚部にわけてのべる。杯部A(13~15)はその下方にわずかな稜をもつ。15は内外面をヘラミガキする。杯部16~21は、その上部に凸帯状ないしそれに近い段をもつ。杯部C(22)は、凸帯状の段を2段もち、やや特異である。杯部Eは筒状の脚部上端から逆ハの字状に直線的に外方へのび、段をもたない(24)。完形の25は上記の杯部Aとしたそれをもち、筒形の脚部の下端にハの字形に外方へのびる脚端部をもつ。杯部の口径18.4cm、器高14.8cm。X2Y12区出土。

脚部は2種にわけうる。もっとも多い脚部A($26\sim33$ 、 $35\sim37$ 、 $42\sim46$)は、筒状の脚部の中ほどあるいは下方がわずかにふくらむ。外面をヘラミガキ、内面をハケメ調整するものが多い。脚部Bは下端に向かってラッパ状に広がる($38\sim40$)。出土区は、36がX2 Y17区(S D03)、38がX2 Y19区(S D04)、41がX3 Y17区(S D03)で、他はすべて S D01内である。なお22は遊離。

椀(第9図48~55)。杯形ないし鉢形のものをひとまず一括する。48は小壺とすべきかもしれない。短い口縁部は頸部でくびれて外反する。口径11.4cm、器高7.2cm。X4Y5区出土。49は口縁端がわずかに外反する。口径13cm。X1Y8区出土。50~52の3点は丸い底部から内弯ぎみに立ちあがる。50は口径9cm、器高約3.5cm。X1Y17区(SD03)出土。51は口径13.4cm、器高約5.4cm。口縁端に近い外面に1条の沈線をもつ。53は内面黒色土器である。内面はヘラミガキする。X1Y19区(SD04内)出土。54は内面に放射状暗文に近いヘラミガキを施し、外面は口縁部を除いて全面を不定方向にヘラケズリする。口径12.2cm、器高6cm。X1Y19区(SD04内)出土。55は台付の椀で内面に放射状暗文に近いヘラミガキを施し、外面は全面をヘラミガキする。SD04内出土。41は台杯椀の脚部である。





- 15 **-**

甕(第10図56~66) 甕Aはくの字形に外反する口縁部をもち、口縁端部は丸くおさめる(56~58・60)。口縁部は 内外面を横方向にナデる。56のみは外面をハケメ調整する。胴部は内外面をハケメ調整するものが多い。口径18cm前 後である。出土区は、56; X 2 Y 8、57; X 2 Y 6、58; X 2 Y 7、60; X 2 Y 11区で、いずれもS D01内である。

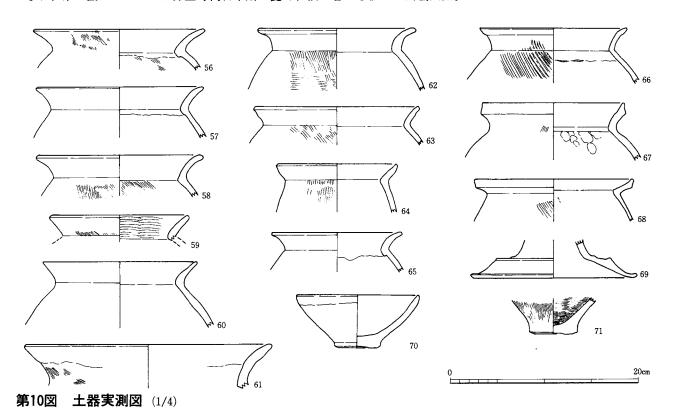
甕Bは頸部から立ちあがりぎみにのびる口縁部をもち、口縁端が強く外反する(62)。口縁部は内外面ともナデ、胴部は外面をハケメ、内面をナデる。口径 $17\,\mathrm{cm}$ 。 $X\,2\,Y\,21$ 区($S\,D\,04$ 内)出土。甕Cは甕Aと同じく口縁部がくの字形に外反し、口縁端部の外面を面どりする $(59,63\sim65)$ 。胴部の外面をハケメ、内面をナデる。出土区は $59;X\,2\,Y\,10$ 、 $63\cdot64;X\,1\,Y\,7$ 、 $65;X\,1\,Y\,8$ 区(いずれも $S\,D\,01$ 内)である。甕Dは口径 $26.6\,\mathrm{cm}$ の大型品で、外反する口縁部は中ほどから強く外傾する(61)。甕Eは甕Aの口縁端が肥厚し、さらに外傾する(66)。 $X\,3\,Y\,12$ 区出土。

鉢(第10図70) 口径13cm、器高 6 cmで、杯形を呈する。蓋とみる考えもあるが鉢としておく。 X 2 Y 8 区出土。 **土師器の編年的位置** 以上の土師器は、出土層位と土器型式から大きく 2 時期にわかれる。一つは S D 01内の 3 b 層の出土土器で、須恵器を伴わない (A 群土器)他の一つは主に S D 01内の 3 a 層と S D 04内のそれに対応する層から 出土したもので、古式の須恵器を伴う (B 群土器)。前者が大部分を占め、後者が少量加わる。

点数の少ないB群土器を抽出すると、椀48~55である。黒色土器の椀53、暗文状のヘラミガキをもつ54・55はいずれもSD04の北端からまとまって出土している。54・55に類似するものは、小矢部市道林寺遺跡の第3号住居跡出土資料にみられ、そこでは古式須恵器が伴出している。この遺跡でも、後述する古式須恵器(第11図81・82)が出土しており、これに伴うものと考えられる。その年代は5世紀末ないし6世紀の初頭におくことができる。台付椀の脚部41や杯Aの13、ラッパ状に開く脚部Bもほば同時期のものであろう。

A群土器は、吉岡康暢氏による北陸地方の土師器編年〔吉岡1966〕では、その第3様式と第4様式の中間に位置づけられている石川県の高座遺跡〔中村1978〕に近い。その土器は高畑遺跡の土器と金丸「宮地式」との中間に置かれ初期須恵器出現の直前のものである。しかし、すでに池野正男氏が指摘した〔池野1983〕ように、A群はそれよりもやや先行するようである。

なお、第10図67・68・71は弥生時代終末期の甕で、後二者はSD01の川底出土。



- 16 -

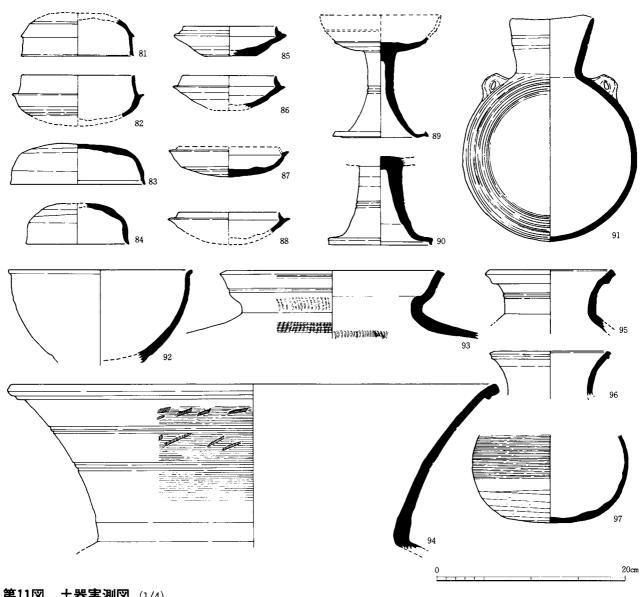
器 (第11・12図) (2) 須 惠

古墳時代の須恵器は、主としてSD01内の3a層から出土し、SD03・04内からも少量出土した。器種には杯・蓋 ・高杯・提瓶・壺・甕・鉢がある。

蓋 (第11図81・83・84) 杯蓋81はいわゆる古式須恵器で、天井部の三分の二を丁寧にヘラケズリする。天井部と口縁 部との境界は突出して鋭い稜をなす。口縁部と稜線部の径はともに12cmで、口縁部は直立する。口縁端部の内側には 段があり、したがって稜線をもつ。頂部は欠損しているが、復原器高は約4.5cmである。SD01内3a層出土。

杯蓋83は口径14.4cm、器高4.3cmで、杯蓋としては大型である。天井部と口縁部との境には段をもたず、わずかな稜 線をへだてて連続する。天井部をヘラケズリする。口縁端部の内面に段をもつ。 Χ 2 Υ 15区 (S D 03内) 溝底出土。 蓋84は口径11cm、器高4.3cmで、83と同じく口縁部と天井部との境には段をもたない。口縁端部はわずかに外側に折れ る。天井部をヘラケズリする。 X 3 Y 21区 (S D 04内) の 3 層出土。

杯 (82・85~88) 82のたちあがりはやや内傾し高さ2cmである。端部の内側にわずかに内傾する面をもつ。受部 は外方へ直線的にのびる。口径12cmで推定器高は約5cmである。外底面は受部近くまで丁寧に回転ヘラケズリする。 X1Y7区(SD01内) 3a層出土。杯85~88は胎土・焼成・型式ともに近似する。内傾する短いたちあがりをもつ。



第11図 土器実測図 (1/4)

口径10cm前後、器高3.5cm前後である。85はX2Y11区(SD01内)、86・87はX1Y17区(SD03内)出土。

高杯 (89・90) ともに無蓋高杯と考えられる。脚部には2条の沈線をもつ。透しはない。SD01内3a層出土。

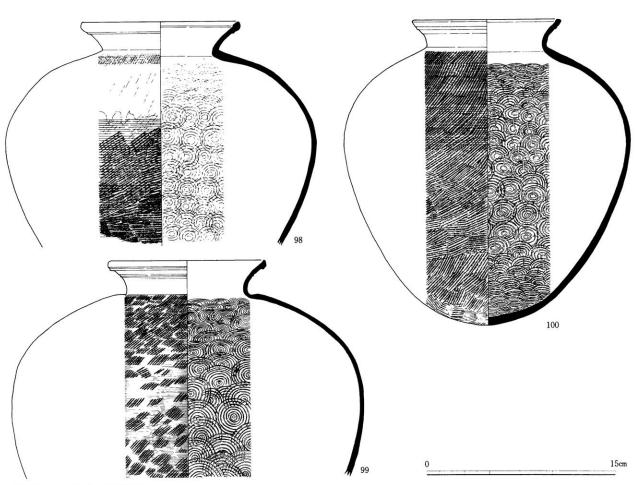
提瓶 (91) 器高26.3cm、口径9.4cm。口縁端は丸くおさめる。口縁部の外面に2条の沈線をもつ。体部の両側に環状の耳がつく。体部の前面に同心円状のカキ目を施す。X2Y7区(SD01内)3a層出土。

壺 (95~97) 95・96は口縁部の破片である。95は口縁端の外面が肥厚し稜をもつ。 X 2 Y 19区 (S D 04内) 溝底 出土。97は体部の破片である。外面の上半をカキ目調整し、下半を回転へラケズリする。 S D 01内 3 a 層出土。

鉢(92) 口径19.4cm、器高約10cmの大型品である。椀形を呈し口縁端がわずかに外反する。SD013a層出土。

甕 (93・94・98~100) 93は口径22cmの中型甕の口縁部である。94は口径52cmの大型甕の口縁部。外面に2条からなる沈線を2段にもち、その間をカキ目調整する。逆ハの字形に外反する口縁部は端部を外面に折りかえし肥厚する。98~100はともに中型の甕である。98は口径25cm、体部の最大径49.6cm。99は口径24.8cm、体部の最大径56cm。100は口径24cm、器高48.5cm。体部内面にみられる同心円状アテ具痕には亀裂痕が認められる。

須恵器の編年的位置 出土須恵器の中で最古のものは蓋81と杯82である。田辺昭三氏による須恵器編年[田辺1966] のTK208型式ないしTK23型式に近似し、5世紀末のものである。また短いたちあがりをもつ杯85~88や蓋84はそのTK217型式に近く、7世紀初頭のものである。脚部に透しをもたない高杯89・90や甕93・94・98~100もおそらくそれに近い時期であろう。口縁部の内側に段をもつ蓋83や環状の耳をもつ提瓶91は、それらより古く、6世紀の後半ごろのものであろう。



第12図 土器実測図 (1/4)

(3) 玉類・その他 (第13図101~105)

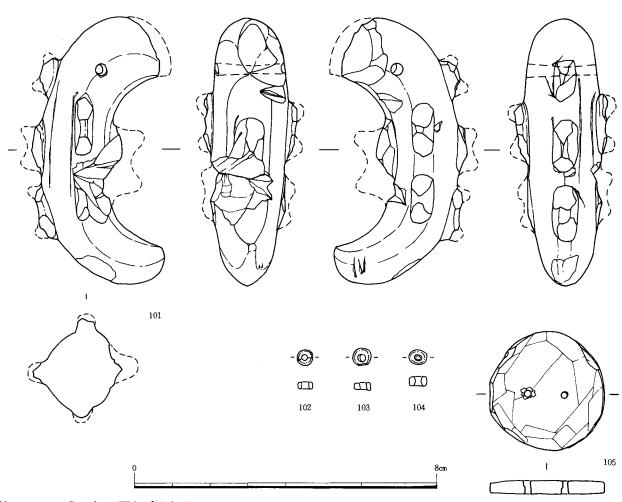
子持勾玉・臼玉・有孔円板がある。これらはいずれも原位置を遊離しており、土器との共伴関係は不明である。子持勾玉はSD04の西側端場で最近の攪乱を受けた層位から単独で出土し、臼玉と有孔円板は、SD01の古墳から平安時代に至る各期の土器が混在する3層上面から集中して出土した。この3層上面は砂質土で平安時代以降の川底と考えられるもので、SD01の流路の中では最も新らしい時期のものである。

子持勾玉(101)、全体に磨滅が著しく各所に破損が見られる。三日月状を呈し、頭尾は尖る。断面は円形である。子の形状は、その全てが一部を欠失し、全容を窺い知ることはできない。子は腹部に1個、背部に3個、胴部にそれぞれ2個の計8個が削り込まれている。頭部の穿孔は両側から行なわれ、紐ずれなどの痕跡は認められない。滑石製で灰緑色を呈する。全長7.1cm。

臼玉 $(102\sim104)$ 102と103は滑石製、104はガラス製品である。いずれも径 $4\sim5$ mm厚さ 2 mm位であるが、ガラス製のものは楕円形を呈し、やや厚めである。

有孔円板(105) 滑石製で径3.1cmの円板に2個の孔を持つ。孔は両面から穿たれ、円板片面は縁辺部が良く磨かれ 凸レンズ状になる。

これらの遺物は冒頭に述べたように年代の決め手を欠くが、古墳時代祭祀遺物の範疇でとらえられるものであり、 とりわけ、子持勾玉や有孔円板は、県内では数少ない滑石製品の出土例である。 (関 清)



第13図 玉類・有孔円板実測図 (1/1)

3 奈良時代

(1) 土 器

(a) 須 惠 器 (第14~16図)

須恵器の器種としては、杯蓋・杯・高杯・壺・横瓶・鉢・甕などがある。分類に際しては、平城宮調査報告〔奈文研1962他〕を参考に、器形の違いを $A \cdot B \cdot C \cdots c$ 、法量差を $I \cdot II \cdot II \cdots c$ あらわすことにする。

杯蓋(第14図 $1 \sim 9$) 杯蓋は、偏平な宝珠形もしくはボタン状のつまみの付くAと、つまみの付かないBがある。 杯蓋Aは、頂部からなだらかに山笠状に開く器形のもの(3・5)、端部近くを横に引き出すもの(2)、偏平な器形のもの(4)などがある。端部の形状は、逆三角形で下端がやや外方に向くものが比較的多いが、丸く終るものや、やや高く立つものなどの変化がみられる。天井部はロクロナデ調整のものが圧倒的に多く、ヘラケズリのみられるものは、全体の $1 \sim 2$ 割程度である。口径からA I ($18.5 \sim 21$ cm)・A I ($15.5 \sim 18$ cm)・A I ($12.5 \sim 15$ cm)、A I ($10.5 \sim 12$ cm) に分類しうる。杯蓋Bは 7 の 1 点のみ確認されており、時期は平安時代に下る可能性がある。

杯 (10~42) 無高台のAと高台の付くBに大きく分類できる。杯Aはさらに、口径14.1cm 器高3.1cmのA I (25) と、口径11.4~13.2cm 器高3.1~4 cmのA I (26~32・35・36・38~42)、口径12.3~12.6cm器高2.4~3 cmのA II (33・34・37) に分けることができる。出土量はA II が最も多く、A III が次ぎ、A I は非常に少い。例外なくヘラ切りのみられる底面は平坦なものが多く、ロクロナデ調整される体部はやや直線的に伸びる。杯Bは高台の付くもので、口径15cm、器高 5 cmのB I 、口径13.8~14.4cm 器高6.6~6.7cmのB II (10・11)、口径10.4~13.8cm器高3.1~4.6cmのB II (12~24) に分類できる。B I は図示してないが、体部に沈線が1条めぐるものである。底部はヘラ切り後高台を貼り付けており、体部の調整は10の外面下部にロクロケズリがみられる他はロクロナデである。高台の形状は、外方に開くもの、細くてやや高めのもの、接地部分が高台内側にあるもの、同じく外側にあるもの、高台貼り付け位置が底部と体部の境近くになるもの、やや内側にめぐるものなどかなりの変化がみられる。

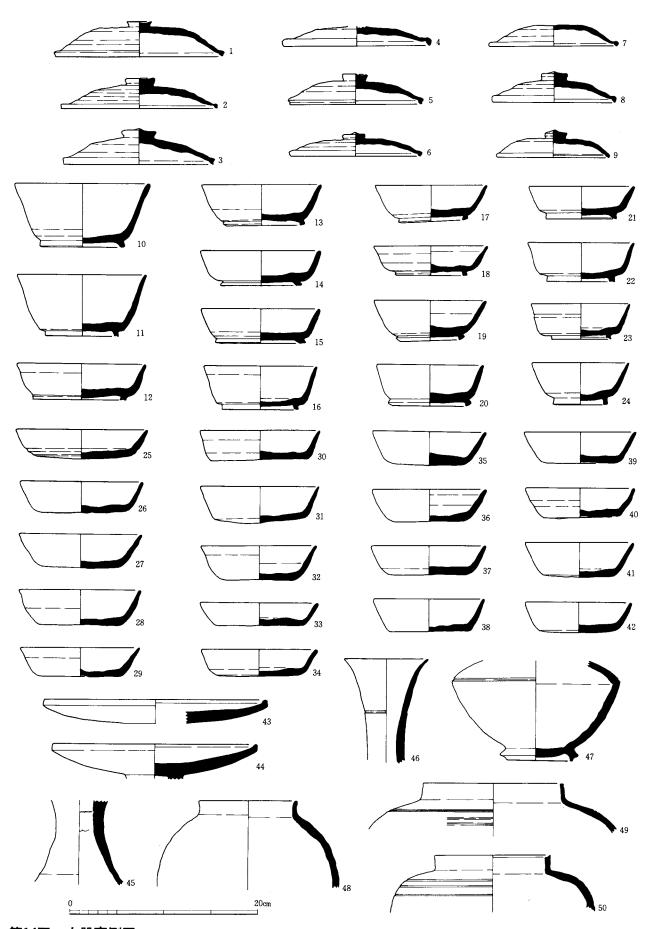
高杯(43~45) 口径22~24cmの杯部に、透し孔のない脚部が付く。口縁端部は丸く、立ち上りはわずかである。 杯部外面はヘラケズリを行っている。色調は灰褐色~赤褐色を呈し、酸化焰焼成に近い。

壺 $(46\sim54)$ いわゆる長頸壺のA $(46\cdot47)$ 、短頸壺のB $(48\sim52)$ 、小型壺のC $(53\cdot54)$ に大まかに分類できる。46は、壺Aの口縁部で中ほどに沈線が1条みられる。47は鋭く屈折した肩部に沈線が1条めぐり、体部外面は底部まで丁寧なヘラケズリがなされる。壺Bはさらにいくつかの形態のものがみられる。50は肩部に3条の沈線をめぐらす有蓋短頸壺。48は内外面ともロクロナデでなで肩になる。52はやや肩が張り、51は口縁端部内側が肥厚し、胴下半にタタキが残る。壺Cとした53は、口縁部が強く外方に開き、端部が少し立ち上る。54は肩が鋭く屈折し、1条の沈線がめぐる。

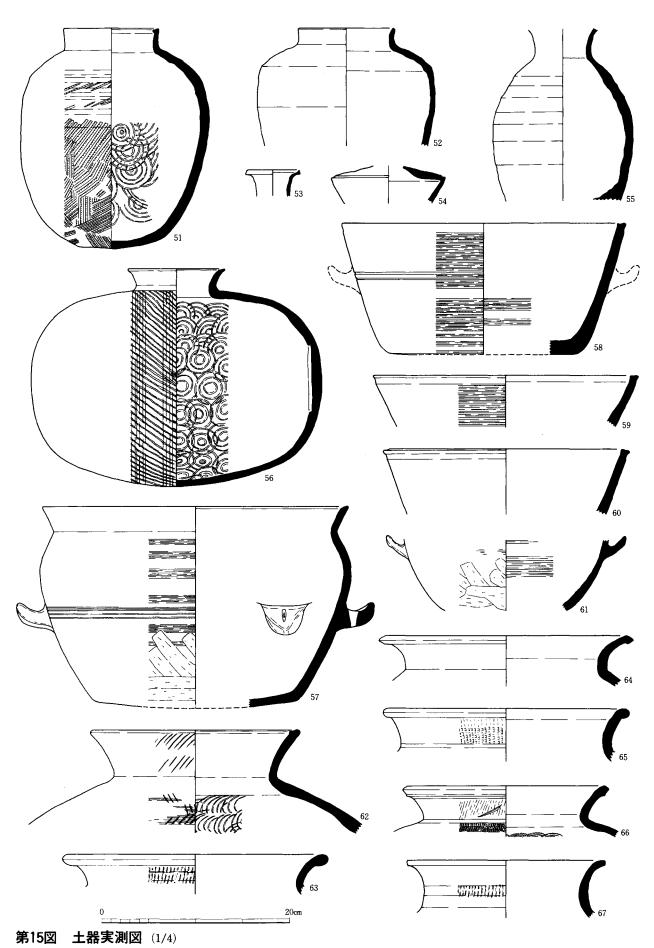
横瓶(56) 体部長推定31cm、器高約23cmの大きさで、外面には平行タタキの後にカキメ、内面には同心円タタキが施される。

鉢 $(57\sim61)$ 平底になるA $(57\sim60)$ とやや丸底風のB (61) がある。A はさらに頸部で屈曲するもの (57) と口縁部が直線的に開くもの $(58\sim60)$ に分かれる。いずれも体部の 2 か所に把手が付き、体部外面上半はカキメ、同下半はヘラケズリ、内面はロクロナデもしくはナデで調整する。 $57\cdot58$ には体部外面中程に数条の沈線がめぐる。

甕 (62~69・71・72) 口縁部の形態と口径にかなりの変化がみとめられる。62は口径22cmで、口縁部が直線的に外方へ開く。63~66は弧状に外方へ開き、端部が肥厚する。67は同じく弧状に開くが、端部の肥厚はない。62・63・65~67の口縁部は、ロクロナデで調整はしているが、平行タタキの痕跡が残る。68は、口縁端部の内側をわずかにつまみ出す。69は小型の甕で、器壁も薄い。71は、わずかに外傾する口縁部にやや偏平な球形の体部がつく。体外面に



第14図 土器実測図 (1/4)



は格子状のタタキとカキメ、内面には同心円のタタキがみられる。72は倒卵形の体部となり、体部上半は内外面ともカキメを施し、下半部外面は平行タタキ、内面は同心円タタキとなる。

以上の他に器種不明の70がある。これは全形を知ることのできる資料にめぐまれていないが、小杉流団№16及び№18C遺跡〔上野他1982〕に類例がある。愛知県猿投窯跡群高蔵寺2号窯出土品〔愛知県教委1983〕にあるような、体部に透し孔のある台状の器形になろう。

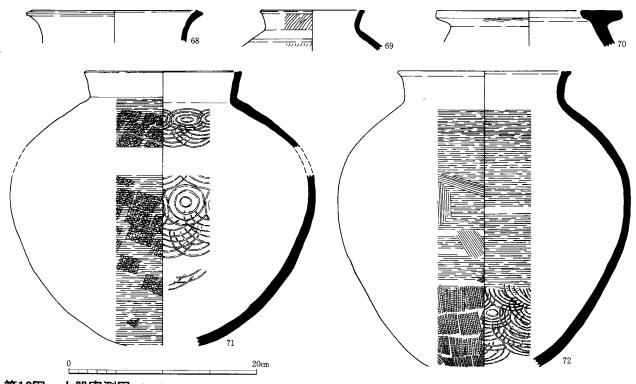
(b) 土 師 器(第17図)

器種としては、杯・甕・鍋・蓋・底部有孔土器などがある。

杯 (第17図83) 83は、口径15.4cm 器高5.4cmの大きさで全面赤彩されている。底部はヘラ切り、体部下半はヘラケズリがみられる。体部は腰で折れて、口縁部は直線的に伸びる。1点のみ出土。

要(73~82) 法量から I ~IV 類に分類できる。甕 I 類は、全形を復元できたものはないが、口径17.5~20.8cmの大きさで、いわゆる長胴型の器形になると考えられる。口縁部から体部上半部にかけては、ロクロナデとカキメで調整する。 II 類(76)は 1 個のみ出土している。口径18cm器高10cmで、底部は丸底に近い平底である。体部内面と外面上半部はロクロナデ、同下半部と外底面はヘラケズリを行う。内外面とも煤状炭化物の付着はない。北陸地方で一般的に認められる小型の甕は、高径指数が100前後からそれ以上のものであり、本例のように指数56を示すものはほとんどない。 II 類(77・78・81・82)は、口径が12.3~13.5cmで、外反する口縁部にややふくらみをもった体部が続く。内外面には煤状炭化物が付く。体部内外面をロクロナデで調整するものが多い。 IV 類(79)は、口径9.8cm 器高 8 cmのもので口縁部が強く外反し、端部が少し立つ。体部のふくらみは少なく丸底に近い平底となる。体部内面及び口縁部はロクロナデ調整し、体部外面から底部にかけてはヘラケズリを施す。内外面とも煤状炭化物が付着する。80は甕田類の底部で回転糸切りが残る。甕の底部に回転糸切りが残るものは他に 2 点あるが全体的にみて量は少ない。

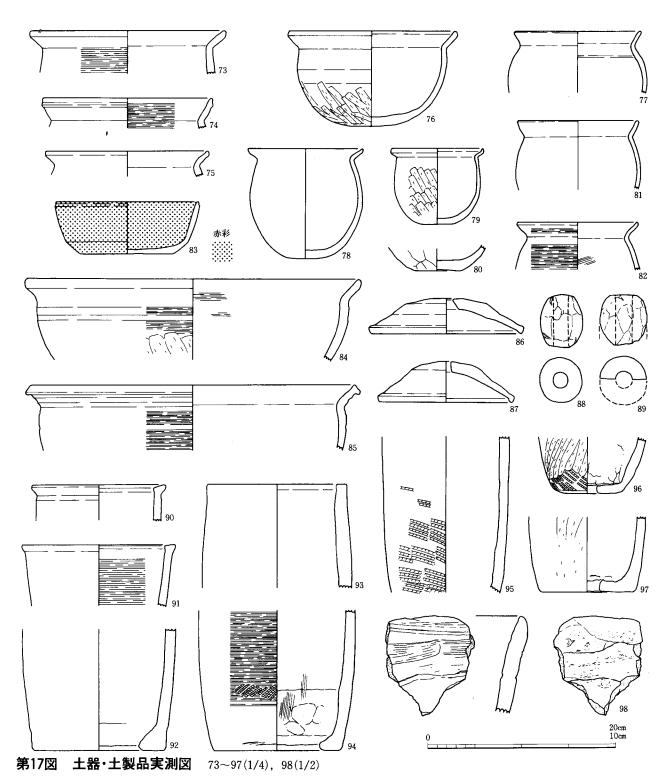
鍋(84・85) 口径約36cmで、端部のつくりはややまるみをおびるものと、面取りして斜め下方へ少し引き出すものがある。口縁部はロクロナデ、外面はカキメの後にヘラケズリを行う。



第16図 土器実測図 (1/4)

蓋 $(86 \cdot 87)$ 蓋AとBがある。蓋Aは須恵器の杯蓋と同形態のものである。小破片のため図示してないが、端部は下方へほとんど折れずに、まるくおさまる。内外面とも赤彩される。蓋B $(86 \cdot 87)$ は、口径14.6~16.4cm器高3.8~4.4cmで、天井部中央には焼成前の穿孔がみられるものである。頂部から山笠状に開き、端部はややまるみをおびた逆三角形状である。内外面ともロクロナデした後、部分的に不定方向のナデを加える。他に類例を知らないので、一応蓋に分類しておく。

底部有孔土器 (90~97) 口縁部がわずかに外側にふくらむものと直口のものがある。体部はほとんど変化のない 円筒形で、底部には焼成前に孔を設けておくものである。これは、孔の大きさと製作手法からA・Bの2類に分ける



ことができる。A類(92・93)は、あらかじめ底部はあけておき、体部下端の内側に断面三角形の凸帯状のものを貼り付ける。B類(96・97)は、普通に底部を製作後、中央に直径 $2 \sim 3 \, \mathrm{cm}$ の孔を刳りぬくものである。

(c) 小 結

土器の組成をみると、供膳形態及び貯蔵形態は須恵器が、煮沸形態は土師器が占めており、機能分担は明確である。ごくわずかに供膳形態に赤彩土師器があるが、日常的なものではなく、祭器として用いられたものであろう。このような土器組成は、北陸地方の奈良時代集落跡に普遍的なものである。この土器組成の中の土師器で、従来あまり注意されなかった器形のものが含まれていることは注目されてよい。特に、口縁部が肥厚する台状のものは、猿投窯跡群や石川県辰口町サクラマチ第3号窯跡〔高橋1975〕にあり、底部有孔土器は、砺波市高沢島Ⅱ遺跡〔神保1978〕・流団内遺跡群などから出土している。今後、その用途や分布・時期などを明らかにしていく必要がある。

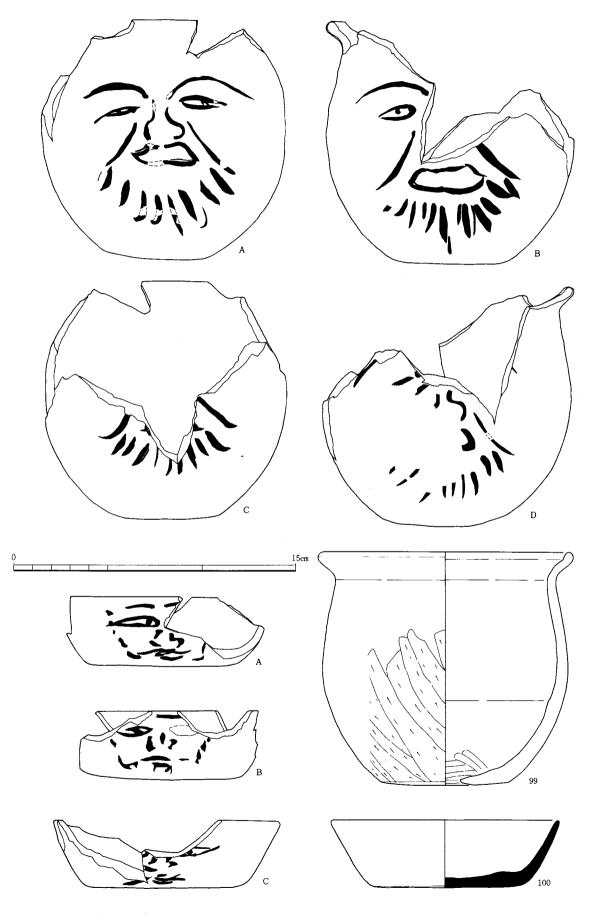
次にこれらの土器群を、須恵器を中心に周辺の窯跡群と対比してみる。まず大型の杯蓋A $I \sim II$ ・体部に沈線のめぐる杯B I、壺A・C、同Bのうち有蓋のもの、横瓶などは、西方800 m にある小杉流団N0.16遺跡第1・2 号窯出土の須恵器に類似する。また口径のやや小さい杯蓋A $III \sim IV$ や杯A、高杯、壺Bのうちなで肩になるものなどは、前者より新しい段階に位置づけられるよう。特に多量に出土した杯Bをみると、流団N0.16窯跡に比べ、口径が1 cm程縮小し、底部のまるみは消えて平底となり、口縁部がわずかに外反していたのが直線的に開くなど、新しい様相を呈している。高杯の口縁端部の立ち上がりが、流団N0.16窯跡の高杯より低くなることも新しい要素のひとつとしてよいであろう。

以上のように、これらの土器群は、AD730年前後に位置づけられる流団No16窯跡に対比できるものを含み、主体を 占めるものはこれより新しい段階のものとみられ、下限はやや不明確である。遺跡の性格上、ある程度の時期幅を考 える必要もあり、一応実年代については、8世紀第2四半期から第4四半期にかけてのものと推定しておきたい。

(**2**) 人面墨書土器 (第18図99·100)

X2Y17区の溝(SD03)の覆土及び下底面と、溝西側の肩の部分から2個体分出土した。99は、口径13.5cm器高12.4cmの小型土師器甕である。外反する口縁部は、端部がまるく、内側にやや肥厚する。体外面下半と外底面はヘラケズリされ、体部上半と内面はロクロナデ、内底面はナデている。底部には直径約1.5cmの焼成後穿孔がみられる。焼成は良好で、この器種に普遍的にみられる煤状炭化物の付着はない。人面は4面に墨書されている(A~D面)。A面の残りが最も良く、B面では左目・左眉と鼻を欠く。C面では顔の中心部を欠き、ひげと口の一部がわずかにみえる。D面では墨痕のかすれがひどく、顔の造作はやや不明瞭である。顔の表現・筆づかいなどをみると、これら4面が同一人物の手によるものと判断される。表現法をみると、顔の輪郭や頭髪は表現しないようである。眉は一筆で弧状に長く引き、目は二筆で輪郭を描いて目玉は点で表現する。鼻は、下側面がまるく左右対称形に近い。開いた口は5~6回に分けて線を引き、その両側には鼻の両側から伸びる線がみられるが、頬を表現したものであろう。あごひげは口の下側に放射状に広がる。特にB面では太い線と細い線が混在し、方向もやや乱れていることから、一部の線は後から書き加えた可能性が強い。

100は、口径12.1cm器高4.6cmの須恵器杯Aである。底部をヘラ切りし、他はロクロナデで仕上げる。焼成はややあまい。人面は体部外面の3か所に墨書される(A~C面)。A面では左目を欠く。B面は右眉を欠くうえ、全体に墨痕の残りが悪く、特に左目は形状が不明瞭である。C面は顔の上半部がかなり失われており、左目・鼻・口の一部が残る。顔の表現法をみると、A及びB面では顔の両側に破線を描いている。これは、顔の輪郭か、あるいはあごひげから続くもみ上げを描いたものであろう。C面ではこの表現はみられない。眉は一筆で引き、目は二筆で輪郭を描く。目玉は点もしくは短線であらわす。鼻は、A面では土師器甕の人面と同様2本の曲線で下側面を丸く表現しているがB面では鼻すじを1本短く引き、小鼻を両側に弧線で描いている。口は二ないし三筆で輪郭を描く。A面の口から横に伸びる線は口ひげをあらわすものであろう。



第18図 人面墨書土器実測図 (1/2)

(3) 木 製 品(第19~23図)

今回の調査で得られた木製品の総数は、237点である。内訳は表 2 に示すとおりである。紙面等の関係から、図示したのは68点にすぎないが、一応、成品と見做し得るものは網羅してある。ただし、橋状遺構の部材である杭などについては省略し、総点数にも含めていない。なお、樹種同定は行なっていないが

これら木製品の多くは、SD04の3層より出土し、その状況は自然木などの在り方から見て、押し流され堆積したものと考えられる。SD04の3層は、砂層を境として二分される。すなわち、砂層上面は奈良時代後半の堆積土であり、下層は古墳時代後期となり、前者を3a層、後者を3b層と呼ぶことにする。木製品の中には、この両層にまたがって出土するものがあり、時期比定できないものがあることから、ここでは明らかに層位が確認できたものについてのみその旨を記すことにする。また、図中の断面に示した木理は、木取りを明確にするために概念的に表示したものである。

始んどが針葉樹で広葉樹と認められるものは、わずか3点にすぎない。

土木材	矢板(3)
建築材	板(2)
食膳具	盤(1)・皿(1)
紡織具	椯(1)・編板(1)
容 器	曲物(4)
武具	弓(1)
祭祀具	刀形(2)·斎串(串状品)(55)
不明品	板・棒・木屑・角材など(171)

表 2 木製品内訳 ()は数量

土木材 (47·48·53)

いずれもSD03から出土した矢板である。47は表裏とも割り面で、片面を削り落して矢板に仕上げる。残存長 111 cm、幅25cm。48は裏に割り面を残し、表から削り矢板に仕上げる。残存長97cm、幅31cm。53は、小型のもので、残存長53cm、幅11cm。SD03は人面墨書土器が出土した川跡であり、これら矢板も同じ層位から出土している。しかし、この層位からは、古墳時代から平安時代に至る各期の土器が混在しており、時期比定は不可能。

建築材 (49)

49は竪木取りの柾目板。板の一端を削り出し、径2.5cmの円形の枘状の突起を作る。板の片面は中央部からそがれ薄くなる。残存長106cm、幅17cm。この他に図示しなかった巨大な板1枚がある。一端に抉り込みがあり、側縁にそって小さな孔が3個見られる。法量は238×27.4cm。竪木取りの柾目板。

食膳具 (7・63)

7は木皿である。竪木取りの厚板を削り込み皿に仕上げる。磨滅が著しく、明瞭な調整痕は見られない。推定口縁 部径18cm。63は四脚付盤。一部を欠くが、口縁部で28×25cm、底面で16×17cmの方形である。器高6cmで、底部木地 の厚さは2cm。底面の炭化が顕著。

紡織具 (62・67)

62は織である。半截した木を台形に整え、頂部に長方形の枘穴を穿つ。枘穴には角柱が残り、上部は欠損する。裏面は枘穴に向けて方錐状に削り込まれる。底面形は24.5×24.5cmの正方形となり、頂部までの高さは8cm。角柱の残存長は4.5cm。

端については、乙益重隆氏の考察がある。氏は千葉県菅生遺跡より出土した方形台状品について、その詳細な観察から「角孔に樹立した棒の上部で、何らかの作業が行われたと解すべき」とし、福岡県沖ノ島二十二号祭祀遺跡出土の金銅製雛形品や三重県鳥羽市神島八代神社などの金銅製神宝に傍証を求められ、端と推察される〔乙益1980〕。当遺跡出土の椯は、乙益氏の指摘を補強するものと言える。3 b 層から出土しており、古墳時代後期に比定される。

67は編板と考えられる。板の一辺に鋸歯状の刻みを持つ。残存長22cm、幅3cm。県内では上市町江上A遺跡〔久々1984〕などに例がある。

容器 (9・10・66)

9・10は、曲物か桶の底板である。9の推定径15cm、10は13cm。両者とも柾目板。66は桶の側板と考えられるもの

で、外面はていねいな削りが施される。やや湾曲するが径を推定できるものではない。長さ23cm、幅8cm。

武具 (52)

SD03から出土した丸木弓である。二つに折れて別々に出土したが、層位、木質、形状などから同一個体と認めた。 弭は両側からていねいに削り出される。芯持ちの広葉樹で弾性がある。残存長58cm、中央部の径2cm。

祭祀具 (1 ~ 3 · 11~16 · 18~46) (第 № 章 2 参照)

刀形木製品・斎串・串状品などがある。これらは当遺跡を特徴づける遺物の一つであることから、別に項を設けた。 **用途不明品** $(4 \sim 6 \cdot 8 \cdot 12 \cdot 50 \cdot 51 \cdot 54 \sim 61 \cdot 64 \cdot 65 \cdot 68)$

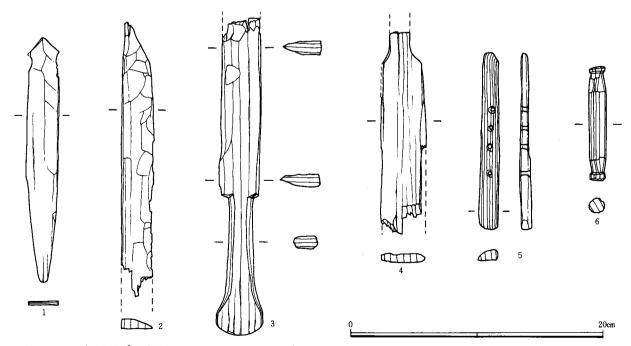
棒状品 $(5 \cdot 6 \cdot 50 \cdot 54 \sim 61)$ 5 は中央部に 4 つの小さな孔を持つ。全長14cm。 6 は両端を削り、有頭状に作る。 $50 \cdot 55 \sim 60$ は断面を円形に仕上げた棒である。 $53 \lor 61$ は先端部を方形に整えたり、細く作ることから、何らかの柄とも考えられる。

板状品 (4・8・11・12・17) 4 はヘラ状を呈する。残存長16cm。 8 は不整な半月状の板に径 1 cm程の孔を 5 箇所に穿つ。蓋とも考えられる。11と12は一端を尖らせる。17は薄い板の両端に 1 mm程の小さな孔が穿たれる。端部は丸く削られる。全長25.1cm。

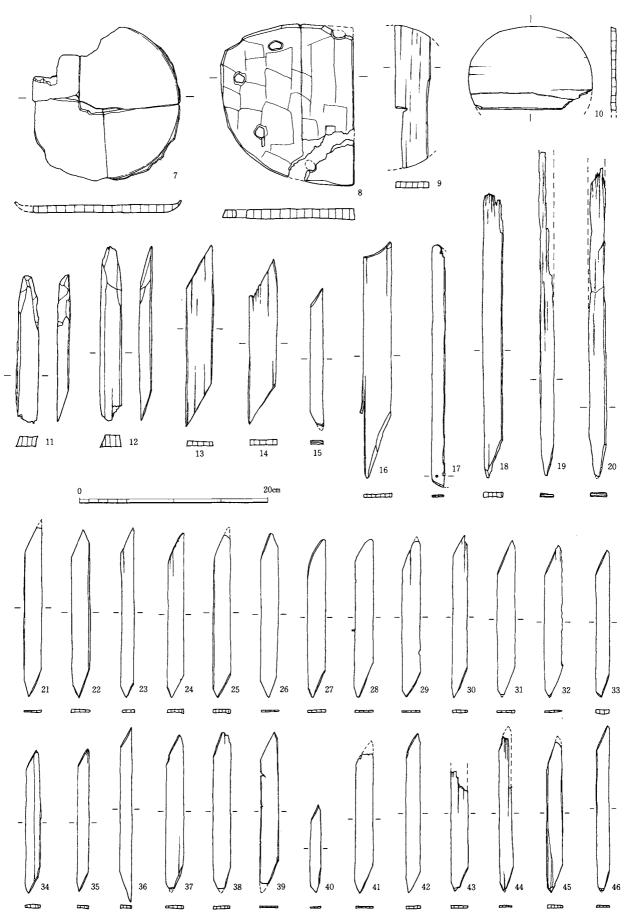
角材状品 (64・65・68) 64は角材の一端を斜に切ったもので、全長23.5cm。65は端部を枘木状に削り出すものである。建築部材とも考えられる。全長21.2cm。68は一面が割れているため全体の形状は不明であるが、抉り込みが見られる。65同様に建築部材とも考えられる。

有孔板状品 (51) 58×37cmの板の一端から斜めに抉りを入れ、その先端を丸く仕上げる。板の縁辺にそって径1 cm程の孔を穿つ。大きな孔は腐朽によるものである。抉りの両翼に厚く削り残す部分があり、図示面の左側には、断面台形の溝が掘り込まれる。この溝には、別の板材が残り、それはこの溝の上部から差し込まれた状態である。そして、溝の上端からクサビを打ち込み、固定している。また右側では、縁にそって直線的な段が見られる。これらのことから当品は、何らかの組まれた成品の部材であることは確かであるが、管見では例がない。

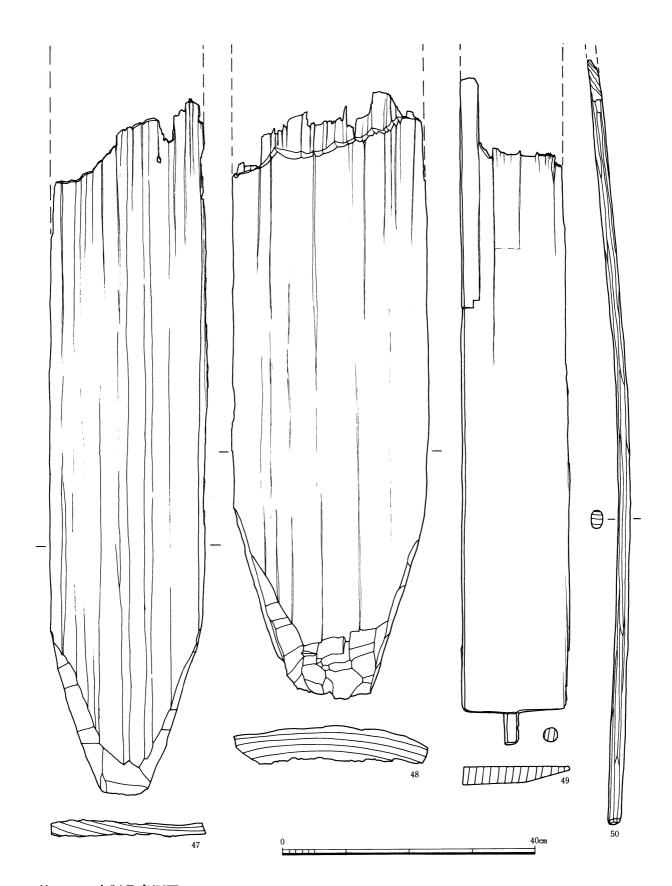
51はSD04から出土し、その層位は3b層で、第9図54の椀と共伴した。したがって、その年代は古墳時代後期に 比定される。 (関 清)



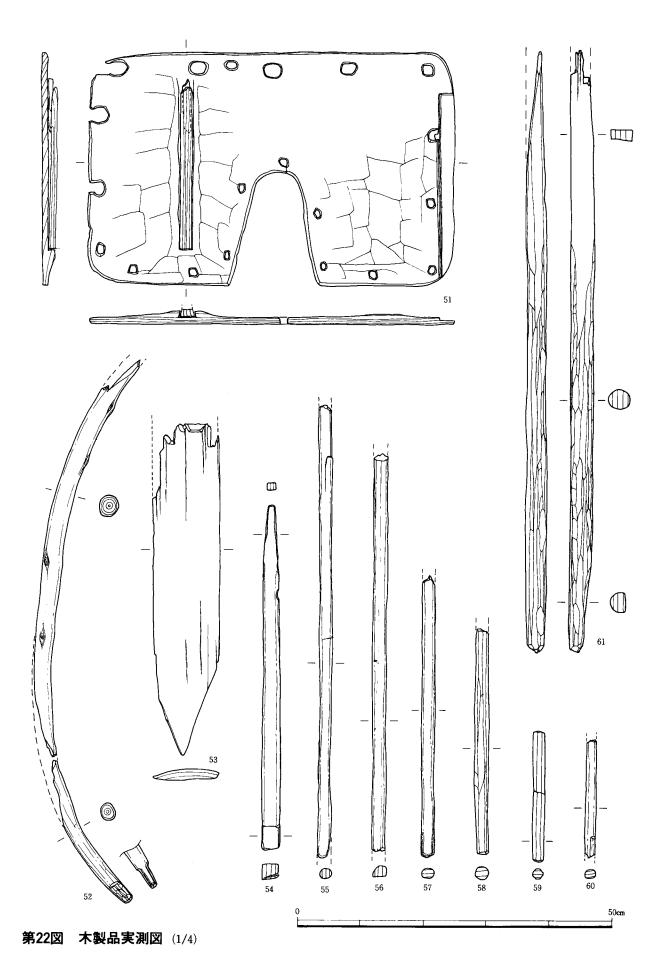
第19図 木製品実測図 (1/3)

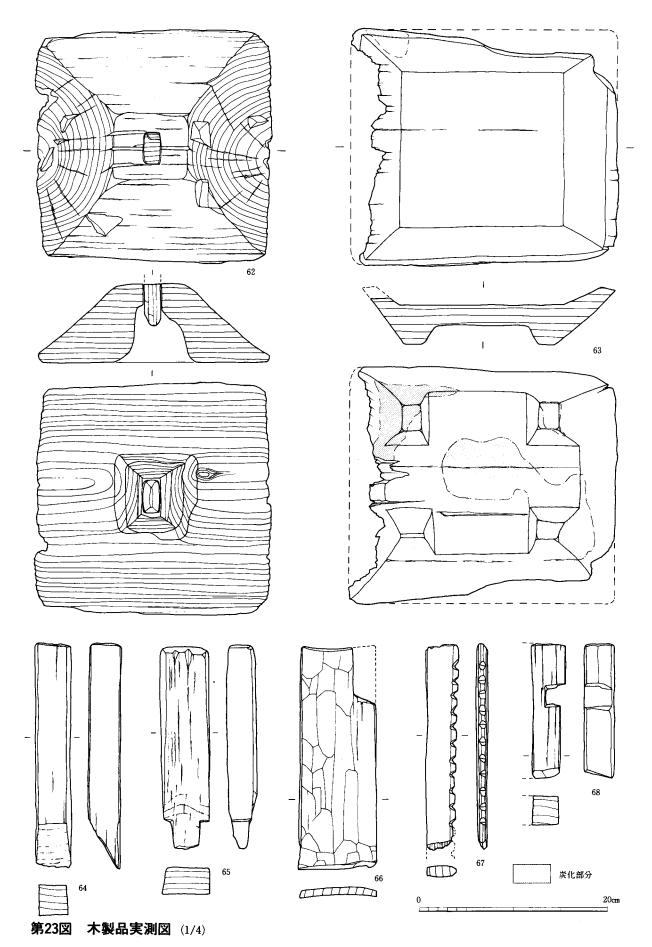


第20図 木製品実測図 (1/4)



第21図 木製品実測図 (1/4)





- 32 **-**

4 平安時代

平安時代の遺物は、土師器が主体を占め、XIY16・17区及びX4Y13・14区の溝の覆土からある程度まとまって出土している。

(1) 須 恵 器 (第15図55・第25図46)

確実に平安時代としうる須恵器は少ない。奈良時代の須恵器としたものの中に一部含まれている可能性があるが、 現段階では分離しきれなかった。第15図55は、底部と口縁部を欠く壺である。内外面ともロクロナデで調整する。第 25図46は、杯もしくは皿の底部で、高台はあまり高くなく、断面はまるみをおびる。

(2) 土 師 器 (第24図1~39・第25図40~45・拓影)

器種としては、杯・皿・甕がある。

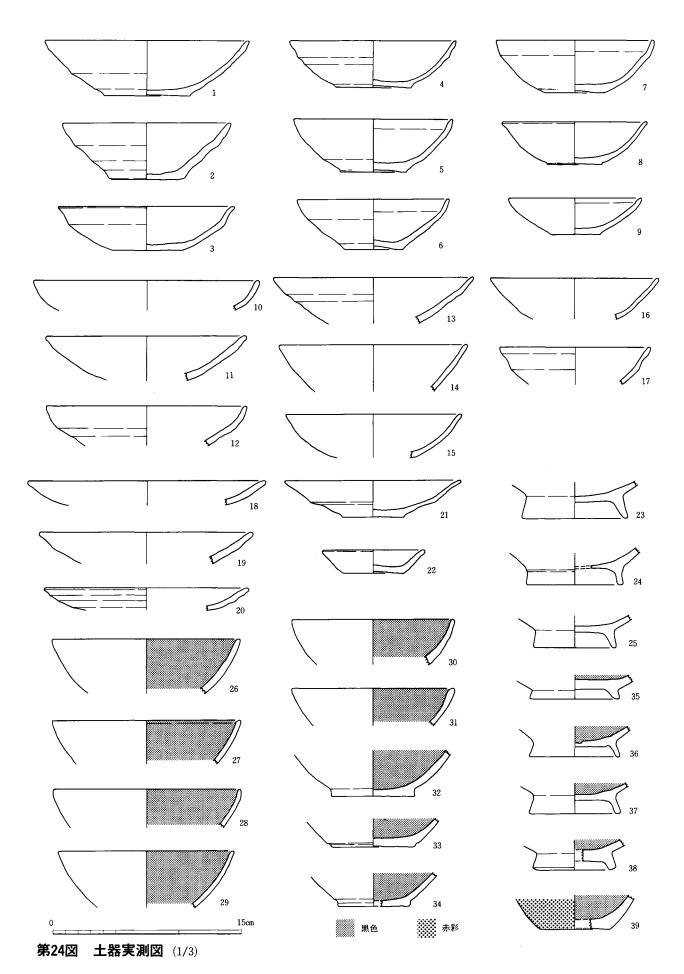
杯($1\sim17\cdot23\sim25$) 無高台のA($1\sim9$)と、高台の付くB($23\sim25$)に大きく分かれる。 $10\sim17$ は、口縁部のみの破片で、底部に高台が付くかどうか不明であるが、とりあえず杯Aに含めて報告する。杯Aは、法量差によって、口径 $15.8\sim17.9$ cmのA I($1\cdot10\sim13$)、同 $13.8\sim15.0$ cmのA II($3\cdot14\cdot15$)、同 $11.5\sim13.6$ cmのA II($2\cdot4\sim8\cdot16\cdot17$)、同 $8.8\sim11.2$ cmのA IV(9)に分類できる。全体的に薄手の作りのものが多く、体部はロクロナデで調整し、底部は回転糸切りによる切り離しとなる。口縁部はやや内弯しながら立ち上るが、直線的に開くもの($11\cdot14\cdot16$)や、外反するもの(3)などもある。 4 は体部の一部が灰色を呈しており、部分的に還元焰焼成となるようである。なお底部糸切り回転の方向は、底部側を見て、黒色土師器杯も含めてすべて逆時計回りとなる(第25図下段)。高台の付く杯B は、杯A に比べて量はかなり少なく、全形が復元されたものはない。底部回転糸切り後、足高の高台を貼り付ける。高台の形状は、 $23\cdot25$ がやや外に開き、24は真すぐに伸びる。

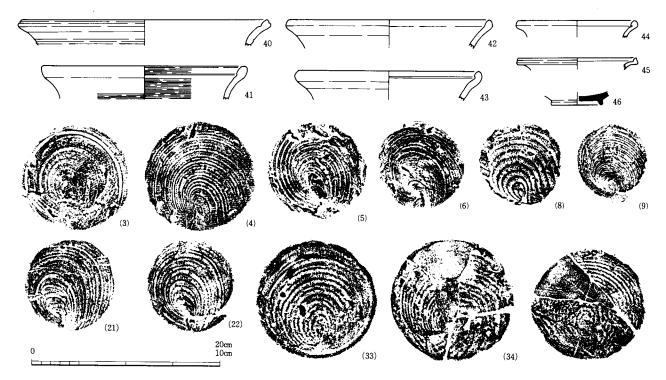
皿 $(18\sim 22)$ 形態から $A\cdot B$ の 2 類に区分できる。皿Aは、体部が浅い傾斜で長く外方に開くもので、口径15.2 ~ 18.9 cmのA I $(18\sim 20)$ 、同 $12.4\sim 13.9$ cmのA II (21)、同 $9.2\sim 10.4$ のA II (21) に分類できる。体部はロクロナデ、底部は回転糸切りによる切り離しとなる。21は、体部中位でわずかに折れて、口縁部は外反する。皿B (22) は一点のみ出土。底径に比べて口径が大きく、体部の長さは短い。器面調整は皿Aと同じである。

甕(40~45) 全形を復元できるものはない。器形は、奈良時代の土師器甕と基本的には同じである。相違点は、外反する口縁の端部の形状で、平安時代のものは、内側に曲げて巻いたり、肥厚させ、あるいはさらに上方へ曲げたりする。甕は、法量差から I ~Ⅲ類に分類する。 I 類(40)は口径約27cm。40は口縁部内外面をロクロナデで調整する。 II 類(41~43)は、口径20~22cm。41の内面及び体部外面にはカキメ調整、42・43はロクロナデ調整がみられる。 II 類(44・45)は、口径13cmのものである。 I ・Ⅱ類はいわゆる長胴型の甕、Ⅲ類は高径指数が100前後の小型の甕になろう。

(3) 黒 色 土 器 (第24図26~39)

杯($26\sim39$) 無高台のA($26\sim34$)と、高台の付くB($35\sim39$)がある。杯Aは、法量差からA I $\sim \blacksquare$ の 3 類に区分できる。A I ($26\sim29$)は、口径 $13.9\sim15.6$ cm、A \blacksquare ($30\cdot31$)は口径 $11.6\sim12.9$ cm、A \blacksquare は口径10.4cmのものである。外面はロクロナデ、内面はヘラミガキ後、黒色処理がなされる。体部はゆるく弧状に立ち上り、口縁部は、土師器杯に比べて傾きが小さい。底部は回転糸切りによる切り離しとなる。底部と体部の境に、段をもつもの(32)や、浅い沈線が一条めぐるもの($33\cdot34$)などがある。杯Bは、高台の形状に変化がみられる。35は断面が逆三角形に近いやや低めの高台が付く。高台内側及び外底面も黒色を呈する。 $35\cdot36$ は、薄手で足高の高台が付く。38の高台はやや低めで端部が角ばる。39は無高台の杯であるが、外面には丹塗がみられ、全体に厚手の作りとなっている。時期は奈良時代にさかのぼる可能性がある。





第25図 土器拓影・実測図 41~47(1/4), 底部拓影(1/2)

(4) 小 結

前記の土器群について、その編年的な位置づけを中心にまとめておきたい。土器組成は、土師器を主体とし須恵器がわずかに伴う。これは当遺跡の特性として、奈良時代の須恵器が大量に混在していて、平安時代の須恵器の抽出が困難であったことを考慮するにしても、前段階に比べて須恵器の占める割合が減少してきていることを示すものと考えられる。主体を占める土師器は、杯・皿類を中心に甕類が伴っている。杯・皿類には、量的にはやや少ないが、黒色土師器を含んでおり、さらに足高の高台のつくものもみられる。これらの特徴をもとに、県内の平安時代の土器群と比較してみる。まず、9世紀代から一部10世紀初頭に位置づけられる入善町じょうべのま遺跡〔高島他編1974〕出土土器と比べてみると、無高台の土師器杯Aの形態はあまり差異がないが、当遺跡では器高の低い皿類や足高高台の付く杯Bがかなりみられ、須恵器の割合が少ないなどの特徴がある。距離的なへだたりもあり、地域差を考慮するとしても、当遺跡の土器師は、じょうべのま遺跡出土の土器群に後続する段階に位置づけて良いと考えられる。

次に下限については、大体平安時代後期とされる福光町古舘遺跡出土の土器〔舟崎1975〕に比べてみると、小型の 皿類が少ないこと、形態的なへだたりが大きいことなどからより古い段階に置く必要がある。また須恵器の壺(第15 図55)は、愛知県猿投窯跡群の黒笹89号窯出土品〔愛知県1980〕に類例があり、黒笹90号窯式として10世紀前半に位 置づけられている〔愛知県1983〕。この形態の壺は、富山県内の窯跡からの出土例がなく、形態的に近似することから 猿投窯からの搬入品である可能性がある。

以上の検討をもとに当遺跡の土器群の実年代を推定すると、ほぼ10世紀代に位置づけることができよう。

5 その他の遺物

(山本正敏)

その他の遺物には、フイゴの羽口・鉄滓・土錘・製塩土器・中近世の陶磁器(珠洲焼・越中瀬戸焼など)がある。 第17図98は、製塩土器の口縁部破片で、他に数片ある。胎土に砂粒を多く含み暗褐色を呈する。器形は平底になるものと推定される。土錘(第17図88・89)とともに、平安時代のものであろう。鉄滓はかなりの出土量があるが、いずれも摩滅している。

N ま と め

1 川跡の形成と埋没 - 南太閤山 I 遺跡 A 地区の変遷-

今回の調査で検出された川跡・溝の土層と遺物のあり方から、川跡の形成と埋没過程を人間活動との関わりにおいて素描してみたい。それに先だち、まず川跡の立地する地盤層の形成過程について簡単にふれておこう。

(1) 川跡地盤層の形成

川跡の地盤層の形成過程を考えるうえで看過しえないのは、その下層で確認された縄文時代前期の遺物包含層の存在である。それはX2Y9区では、川跡形成面の4m近く下層の深部にみられる。この縄文時代前期の層から上面までのあいだには、遺物を含まない泥土と砂(質土)の厚い層がみられ、それが水性の堆積によって形成されたものであることを示している。しかもX3Y13区のトレンチ断面でみると必ずしも水平ではなく、レンズ状の堆積がおり重なるように幾層も認められる。こうした堆積状況は、不安定な氾濫がくり返されたことを示し、絶えまない沖積作用によってこの谷平野がしだいに埋没していった過程を物語るものである。また川跡の地盤をなす上層のシルト層は、ほぼ水平に堆積していることや微粒であることから、その形成段階にいたって沖積作用が安定し、現在にほぼ近い「地盤」が形成されたことを示すものであろう。その間の経過時間を知る手がかりはもたないが、少なくとも縄文時代前期以降の数千年の時間幅のあることは疑いない。

(2) 河道SD01・04の形成と消長

河道SD01・04の形成とその流路 ついで、上記のシルト層を切りこむように河道SD01とSD04が形成され、蛇行しながら北西方向に流れていた。このことは、北側の57年度調査区内でSD01の上流とSD04の下流が合流していることや、下層の遺物のあり方から明らかである。SD01の川底から出土した弥生時代終末期の土器は、河道の形成・存続時期の一端を示すものである。

調査区の北西端でとぎれる河道SD01の下流は、おそらくさらに北西にのび、こんにち谷平野の中ほどを北流する下条川の旧河道に達していた蓋然性が高い。一方、その上流は、ひとつには河道SD04の南東の未調査区に求めることができ、上野集落の東の谷奥にその源を発するものと推定される。他のひとつは、北接する57年度調査区のさらに北側に求めることができ、こんにち太閤山の住宅街となっている東側の谷筋から流れでたものとみることができよう。

以上みたように、2次にわたる調査で検出されたSD01とその上流は、谷筋の流れを集めた「古下条川」の支流のひとつと考えられるのであり、人工的な開削による「大溝」とはまずみなしがたい。言いかえれば、往時の自然河道が埋没したものであって、標題に掲げたごとく「川跡」と表現しうるものである。

谷平野の開発と小河川 この川跡は、確かに自然の小河川には違いなかった。しかし、この下条川水系の谷平野でも、遅くとも弥生時代の後期には、こうした小河川を灌漑用に利用しながら谷水田の開発が進められたと考えられる。後掲の橋本真紀夫報文が明らかにしているように、花粉分析の結果、SD01の川底でもイネ科植物(Gramineae)の花粉が検出されていることはそれを一部裏づけるものである。また周辺の遺跡に目を向けると、南方約500mの上野遺跡に弥生時代終末期の集落がすでに形成されている。そして、同じ南太閤山 I 遺跡のB・C地区(東側の丘陵上)にはほぼ同時期の方形周溝墓群が営まれている。これらの遺跡は、下条川水系の谷平野を生産基盤にして農耕集落が形成され、墳墓が営まれたことを示すものである。

河道SD01・04の消長 先に示したSD01の土層断面図(第2図)に即していえば、弥生時代終末期以降、川底の7層から6層→5層→4層へとしだいに河道の埋没が進行し、3 b層によって示される古墳時代前期の後半(5世紀前半)には、この川は、常時水の流れることのない沼状の「淀み」ないし「ぬかるみ」に近い状況を呈していたようで

ある。すなわち、土質と堆積をみたとき、4層や7層が流水性の堆積を示すレンズ状の砂層であるのに対し、3 b層 は植物遺体を密に含む茶褐色の粘質土であることや、3 b層の上面が、わずかに窪んでいるとはいえほぼ平坦になっていることからそれを窺いしることができる。上にのべたことは、後掲の花粉分析の結果に基づく植生復原と照らしあわせても矛盾するものではない。ただ、3 b層の上面には、第 4 図にみるごとく河道にそって自然流木が集中して堆積していたので、おそらく増水時(期)には流路となっていたようであり、河道そのものはなお存続していたと推定される。なお、上流の S D04では、橋状遺構の下層の茶褐色粘質土がこの「滞流性」の3 b 層に相当する。

SD01・04は古墳時代後期に至っても前代と大差のない状態が続いていたようである。SD01の3b層の上面に薄く堆積した3a層がそれを示す。ただ3a層では、ふたたび砂を多く含んでいるので、一定の水の流れはあったとみてよい。SD01の3a層出土の須恵器(第11図81・82)やSD04出土の土師器(第9図53~55)は、いずれも5世紀末ないし6世紀前半のものであり、これによって3a層の形成時期の一端をとらえることができる。また3a層から2b層の下面にかけて7世紀初頭の須恵器、奈良時代の土師器と須恵器が含まれているので、その間には大きな変化はなく、水の流れの少ない比較的安定した滞流状況にあったと考えられる。もっとも奈良時代には、SD01内ではその東側(X1・2Y11・12区)を、SD04内では西側を、川幅を狭めながら流れていたようである。SD04内の橋状遺構やその北側一帯から出土した須恵器の杯がそれを示している。

(3) SD02・03の形成と川跡の消滅

SD02・03の形成 一方、上にのべたSD01・04がかなり埋没したころ、遅くとも古墳時代の終末期、7世紀の初頭にはSD01とSD04の中間に浅い溝SD03が形成され、奈良時代から平安時代中期ごろまで存続していた。SD03は、先にものべたように蛇行しながらSD01の東側の上層に流れこみ、SD02となって西流していた。その下流は、SD01と同様、調査区の北西の隅に達しており、おそらくさらに北西の「古下条川」にのびていたはずである。

このSD03では、後述するとおり奈良時代の後半に人面墨書土器を用いた祭祀、――「歳え」の儀式が行われた。 隣接するSD04の上層から出土した「斎串」状木製品もそれと深く関わるものであろう。

川跡の消滅 $SD02 \cdot 03$ では、平安時代中期の土器を最後として遺物はみられなくなる。平安時代後期以降、この溝もしだいに埋没していったのであろう。またSD03の埋没が進行するにつれ、SD01やSD04などの旧河道もほぼ同時に姿を消したものと思われる。そして遅くとも中世には、その上層に水田が形成され、こんにちにほぼ近い景観が出現していたであろう。花粉分析の結果、近年の耕土直下にみられた2a層でイネ科植物(Gramineae)の花粉がもっとも多量に検出されたのはそれを裏づけるものである(付載1、橋本報文fig.1参照)。 (岸本雅敏)

2 木製祭祀具について

祭祀具には石製、土製、金属製品などがあり、これらと同様に木製品の祭祀具の存在を指摘したのは、大場磐雄氏であった〔大場1937〕。その後木製祭祀具は、平城宮跡や各地官衙跡などの調査の進展に伴い、確実にその数を増し、最近では金子裕之氏の体系的研究がある〔金子1975〕。金子氏はその論考で、木製祭祀具や木製形代の名称で呼ばれてきたものを木製模造品の名称で概括し、その成立期を7世期後半の天武・持統朝の頃とする。そしてこの時期に従来の伝統をもとに、新たに中国系祭祀具をつけ加え、再編成させたと推察する。このことは、多様な祭祀具を体系化し、その成立と展開について論証したものとして高く評価される。

ところで、南太閤山 I 遺跡からは、人面墨書土器や斎串など、律令的祭祀を裏付ける資料が出土している。しかし木製祭祀具に限って見た場合、その出土位置、層位などから、一律に律令期の所産とは考え難いものを含むことと、その種類において、刀形木製品と斎串の二者しかなく、斎串は祭祀具でありながら、その使途において、模造品とは考え難いことからあえて木製祭祀具の名称を用いた。ここでは前章で省略した遺物の観察を通して、当遺跡の性格の一端にふれてみたい。

(1) 種類とその年代

刀形木製品 (2・3) 2は刀身部分。棟は平に作り、身の調整は片面がていねいに行なわれる。残存の長さ22cm、幅2.5cm。3は刀身の半分を欠く。柄の基部は丸く仕上げ、環頭太刀あるいは頭椎太刀を模したことも考えられる。 区は明確に表現され、刃部も両面から削り、鋭角に作る。平棟。残存長25.5cm、身の幅3.2cm。柄基部から区までの長さが11cmであり、全体のバランスから、刀身はかなり長いものであったと推察される。

これらは、いずれもSD04から出土し、層位は3b層である。したがって刀形木製品は、古墳時代後期に比定される。県内では初例である。

斎串・串状品 (1・11~16・18~46) 明らかに斎串と認められるのは1のみで、19・20などは一部を欠くが一応、 斎串と考えられるものである。他のものは、カッターナイフの刃状のものや台形のものなど、多様である。後者については、静岡県神明原・元宮川遺跡に例があり、斎串として紹介されているが〔静岡埋文研1983〕、確証を得るに至っていないと解し、あえて串状品と呼んだ。なお、1・11・12を除いては全てSD04からの出土である。

1 は頭部を圭頭状に下部を剣先状に作るもので、頭部側面には、切り込みが施されていたと考えられる。いわゆる削りかけである。表面の調整が中央部から両側に行なわれるために稜線が中央に残る。裏は割り面である。全長19.4 cm、幅2.5cm。19・20は細い板の先端を尖らせたものである。 $1\cdot19\cdot20$ ともに板目材を使用する。 $21\sim46$ は X4 Y19 から一括して出土したものである。何らかの組み物かとも考えられたが、法量、形状などに画一性がなく、それは否定される。 $15\sim17$ cmのものが最も多く、幅は 2 cm前後である。全て柾目板を使用する。

この串状品については、京都府長岡京左京三条二坊〔高橋1975〕や難波宮跡などに例があり、斎串として取り扱われている〔奈良文研1985〕。これらは、人形や削りかけなどに伴って出土していることが根拠とされる。当遺跡の場合には、刀形木製品や人面墨書土器などとはかなり離れた地点から出土しており、また13や14のように幅の広いものなども存在することから、斎串と断定するには根拠に欠けると考える。ただし、一括して26点の串状品が検出されたことは、使用後意識的に遺棄されたことを窺わせるものであり、その使途が斎串であったことも否定し得ない。このようなことから、とりあえず串状品と呼んでおく。

この串状品は3a層からの出土であり、奈良時代後半に比定される。

(2) 小 結

南太閤山 I 遺跡から出土した木製祭祀具には、古墳時代のものと奈良時代のものがあることが判った。前者は環頭太刀あるいは頭椎太刀を模したものと考えられるもので、その盛行期と矛盾しない。このことは、当遺跡でも出土している、子持勾玉・有孔円板・臼玉などと同様に古墳時代祭祀遺物の一つと考えることができ、木製祭祀具が普遍的に使用されていた可能性を示唆する。

斎串の性格については、その形態から祭祀遺物と推測されながらも、具体的内容は不明とされてきたが、最近報告された山形県俵田遺跡〔佐藤・安部1984〕では、人形のまわりに斎串や馬形を立てて、囲んだ状態を留めて発見された。この事例から金子裕之氏は、祭祀空間の結界を表わすために使用されたと考察する〔金子1984〕。この考察は、俵田遺跡における遺構の状態が良好であることと、『延喜式』の四時祭・祝詞の大祓条と一致するという根拠を持つだけに妥当と考えられる。

ところで、当遺跡から出土した斎串及び串状品は、前述のように多様な形態である。この中で共通するのは、先端が鋭角に仕上げられることであり、土中に突き立てて使用する斎串の機能の一面を有するものである。また、その出土状況が、まとめて遺棄された様相を呈していることからも、串状品と呼んだものが斎串である可能性を指摘できる。所属時期は奈良時代後半であり、律令的祭祀の普及した時期にあたり、同時期の人面墨書土器も出土していることから、当遺跡で律令的祭祀が行なわれ、それにこれら木製祭祀具が伴っていたと想像するのに難くない。(関 清)

3 人面墨書土器について

出土遺物のなかでとくに注目されるのは人面墨書土器である。北陸地方での出土初例となったこの土器について、 ここでは既応の研究成果に照らしながら若干の検討を加えてみたい。

(1) 人面墨書土器とは

人面墨書土器とは、文字どおり人面を墨書した土器をさし、一般に土師器の甕や壺の外面に墨で人面を描いたものである。通常、河道や溝などかつて水の流れたところから出土し、ときに井戸からも出土する。奈良時代の後期から平安時代前期に盛行し、一部は中世まで受けつがれる。土器に描かれる人面のモチーフは、ドングリ目、たれ目、あるいはつりあがった目に、鼻はダンゴ鼻で顎は髭づらといった男の顔である。その表情も恐ろしげな顔、病みにつかれた顔、おどけた顔などさまざまである。だが、いずれも古代の他の戯画とは趣きを異にし、そこには手本にならったかのごとき共通性の見うけられるものが多い。土器に描かれた顔は疫病神や邪鬼を表わしたもので、人面墨書土器は、身に憑いた病神や罪・穢れを息吹きとともに壺に封じこめ、水に流したものとされている。こうした儀礼は、ほんらい中国の道教の思想・儀礼に由来するもので、奈良時代に中国から将来され宮延内での「大殿」の体系化のなかに組みいれられたと考えられている。それはおそらく律令制下の地方行政機構(おそらく国衙)を媒介として、やがて地方にも伝播していったと思われる。その意味で人面墨書土器を用いた「歳え」の儀式は、成立当初には中央的・律令国家的な性格を色こくおびた祭祀であったと思われる。

(2) 南太閤山 I 遺跡の人面墨書土器

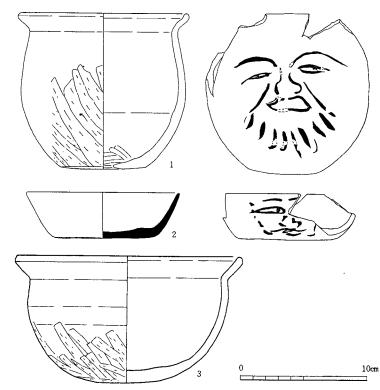
今回出土した人面墨書土器(以下、人面土器と略)も各地の諸例のあり方と基本的に異なるところはない。したがって上にのべた人面土器の一般的性格を内包するものと考えてよい。まず出土地点はSD03と呼んだ浅い溝内である。時代は伴出の須恵器から奈良時代の中頃から後半と考えられる。つまり人面土器が盛行した時期である。

人面土器は2点ある。1点は土師器の小型の甕で、他の1点は無高台の須恵器の杯である(第26図 $1\cdot 2$)。甕には

4面にやはり髭づらの男の顔が、杯にも3面に同じく男の顔が描かれている。他の諸例と同様、いずれも個々の土器の人面は同一人物の手で描かれている。人面土器に描かれる顔面の数は、1面を別とすれば一般に2面・4面・6面と偶数のものが多い。その点で上記の杯の3面というのはやや特殊である。また須恵器の杯を利用した例も数少ない。

土師器の甕は口径13.5cm、器高12.4cm、径高 指数92で、当地方で一般にみられる在地産の日 常用土器である。底部には焼成後に小孔が穿た れているが、これはおそらく、日常用の土器を 「祓え」の儀式用に転用するにあたって、仮器 としての性格を付与するために穿孔したものと 考えられる。

なお、人面土器の細部の諸特徴については、 「遺物」の項で詳述したとおりである。



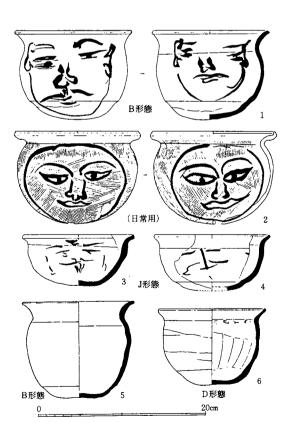
第26図 人面墨書土器と「人面用土器」

(3) 「人面用土器模倣形態」の甕

人面土器と関連して看過しえない土器に1点の土師器の甕がある(第26図3)。同じく溝SD03内の人面土器のごく近くから出土したものである。この種の甕は北陸地方にはまずみられない器形である。北陸地方の小型の甕は、前記の人面土器に示されるように、一般に径高指数が100前後ないしそれ以上であるのに対し、この甕は口径18cm、器高10cmで径高指数は56である。一方、この土器に近い器形は平城京出土の人面土器のなかにみられる。その甕には、日常用の土器が転用されたものと人面を描くために特別に作られた「人面用土器」との二種あるが、この甕は後者の一部により近い。具体的にいえば、平城京右京八条一坊十一坪の溝SD920出土の人面土器はA~Jの10形態に分類されている〔巽1984〕が、なかでもそのJ形態ないしD形態に近似する(第27図)。ちなみにJ形態の径高指数は、例示した第27図 3 が45、同 4 が50、そしてD形態(第27図 6)のそれは61.5である。

以上みたようにこの甕は、平城京の人面用土器に形態的な共通性を見い出せる。けれども土器の成形・調整技法は明らかにそれとは異なる。平城京の人面用土器は、皿状の型の内側に粘土をつめて底部を作り、型をつけたまま粘土を巻きあげて上部を成形し、「胴部・底部外面には特に調整を施さず、型の痕跡と粘土紐巻き上げ痕をとどめる」ものである〔巽1983〕。しかしこの甕はまずそうした成形技法によるものではない。また調整技法は、胴部の下半から外底面の全面をヘラケズリするものである。こうした外面のヘラケズリ技法は、北陸地方では奈良時代以降の土師器の甕と鍋にほぼ普遍的に認められる。事実、在地産の日常用甕とした前記の人面土器(第26図1)もその例にもれない。

以上の諸点から、平城京の人面用土器に近い器形をもち北陸地方の技法で作られたこの甕は、それを模倣して作られた「人面用土器模倣形態」ともいうべき在地の土器であると考えてよい。だがこの土器自体には人面が描かれていない。これをどう解すべきか。実は平城京の人面用土器には人面の描かれていないものが多数ある(第27図5・6)。 先にふれた溝SD920では、約460個体の人面土器とともに「無文の」人面用土器が約200個体出土しており、これらも



第27図 平城京の人面墨書土器と人面用土器 〔奈文研1984〕

人面を描いたものと同じく祭祀に使用されたと考えられている。 だとすれば、この人面用土器模倣形態の甕もまた、前記の人面 土器とともに祓えの祭祀に使用されたものとみてよい。上にふ れたその出土状況からもそれは首肯される。その意味でこの甕 は、人面こそ描かれていないが在地における「人面用土器」そ のものといえる。この土器の存在は、人面土器祭祀が中央から 伝播したという冒頭の考えをさらに裏づけるものである。

(4) 人面土器祭祀の背景

人面土器による祭祀は、「中央畿内で盛行し、おそらく各地に 赴く官人たちによって地方にも伝えられ」たと言われている〔小 出1981〕。これは認めてよいが、この遺跡のばあい越中国府推定 地(高岡市伏木)から約11kmも離れており、ただちにそれと結 びつけることはむつかしい。また射水郡衙の所在地も不詳であ り、それと関連づけうる材料もない。あるいは逆に、この土器 から至近地における郡衙の存在を推定する考えもあろうが、現 状ではむしろ数キロ内外の至近地にこうした人面土器を用いた 祓えの祭祀を行いうるような官人層が居住していたことを示唆 しているように思われる。 (岸本雅敏)

参考・引用文献

ア 愛知県教育委員会 1980 『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告(Ⅰ)』

愛知県教育委員会 1983 『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)』

- イ **池野正男・宮田進一・斎藤 隆** 1983 「南太閤山Ⅰ遺跡」『都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘 調査概要』富山県教育委員会
- ウ 上野 章・狩野 陸・池野正男・宮田進一・久々忠義 1982 『富山県小杉町・大門町小杉流団地内遺跡群第3 ・4 次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- オ 大場磐雄 1937 「上代馬形遺物に就いて」『考古学雑誌』第27巻4号 日本考古学会 乙益重隆他 1980『上総菅生遺跡』中央公論美術出版
- カ 金子裕之 1975 「古代の木製模造品」『研究論集 Ⅵ』 奈良国立文化財研究所 金子裕之 1984 「祭祀」『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』 奈良国立文化財研究所
- キ 木倉豊信編 1958 『小杉町史』前編 小杉町
- ク 久々忠義 1984 「江上A遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告―上市町木製品・総括編―』(本文)上市町教育 委員会
- コ 小出義治 1981 「祭祀と土器」『神道考古学講座』第3巻 雄山閣
- サ 佐藤庄一・安部 実 1984 『俵田遺跡第2次発掘調査報告書』山形県教育委員会
- シ (財)静岡埋蔵文化財調査研究所 1983 「宮川地区と古墳時代の祭祀遺物」『調査研究所だより』№21
 神保孝造 1975 「5 高沢島Ⅱ遺跡 奈良時代の遺物」『富山県砺波市栴檀野遺跡群予備調査概要』砺波市教育委員会
- タ 高島忠平・橋本 正・舟崎久雄編 1974 『富山県埋蔵文化財調査報告書 Ⅲ』富山県教育委員会

高橋 裕 1975 『辰口町来丸サクラマチ古窯』石川県教育委員会

高橋美久二 1975 「長岡京左京三条二坊の調査」『京都考古』第11号

巽淳一郎 1983 「人面墨書土器」『平城京東堀河 左京九条三坊の発掘調査』 奈良国立文化財研究所編 奈良 市教育委員会

巽淳一郎 1984 「祭祀用土器・土製品」『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所 田中勝弘 1973 「墨書人面土器について」『考古学雑誌』第58巻第4号 日本考古学会

ナ 奈良国立文化財研究所 1962 『平城宮発掘調査報告Ⅱ』

奈良国立文化財研究所 1985 『木器集成図録 近畿古代編』

- フ 舟崎久雄 1975 『富山県福光町古館遺跡発掘調査概要』福光町教育委員会
- ミ 水野正好 1974 「祭礼と儀礼」『古代史発掘 10』(都とむらの暮し) 講談社

水野正好 1982 「人面墨書土器―その世界―」『古代の顔』福岡市立歴史資料館

図 版



1.遠景 東から



2.全景 東から



3.全景 西から

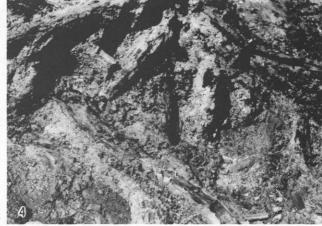


1.川跡(SD01) 断面 X1·2Y 8区 西から



2.川跡(SD03) 南から





3.川跡(SD01) 上面 南から







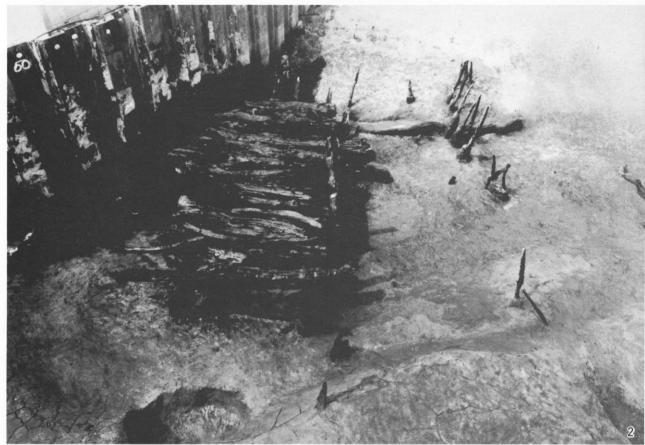
5.甕出土状態 (SD03)

6.人面墨書土器 出土状態 (SD03) 南から

図版 3



1.橋状遺構 (SD04) 東から



2.橋状遺構 (SD04) 東から



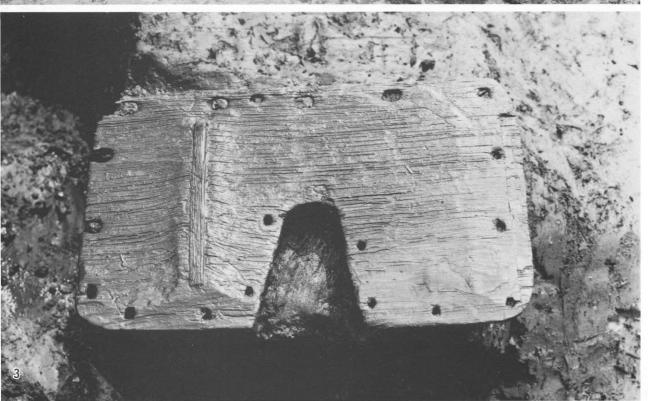
3.橋状遺構 (SD04) 北から



1.橋状遺構周辺 (SD04) 西から



2.土器出土状況 (SD04) 西から



3.木製品出土状 況 (SD04)

図版5







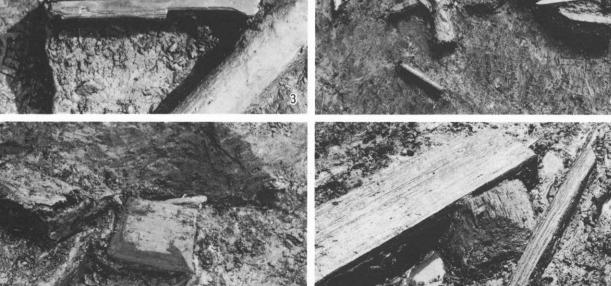
2.木出土状況 (SD04) 北から

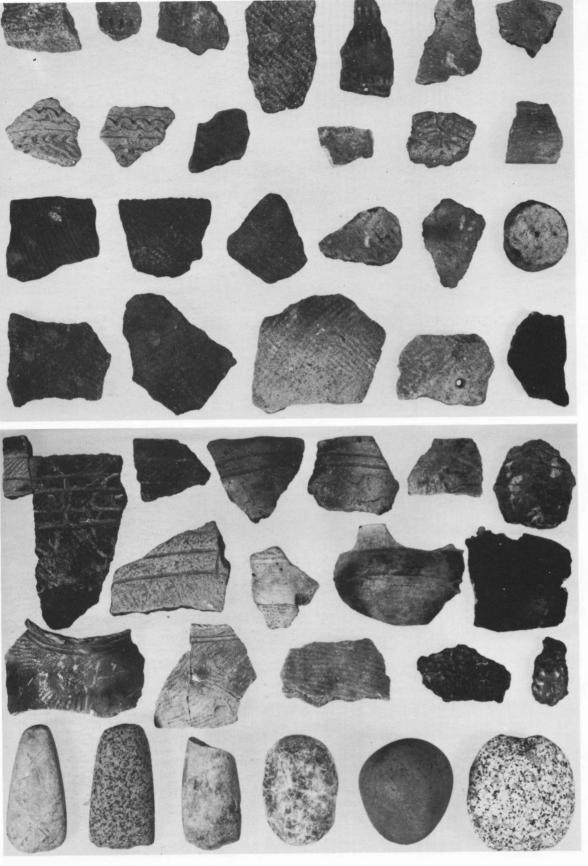


4. 斎串出土状態 (SD04)

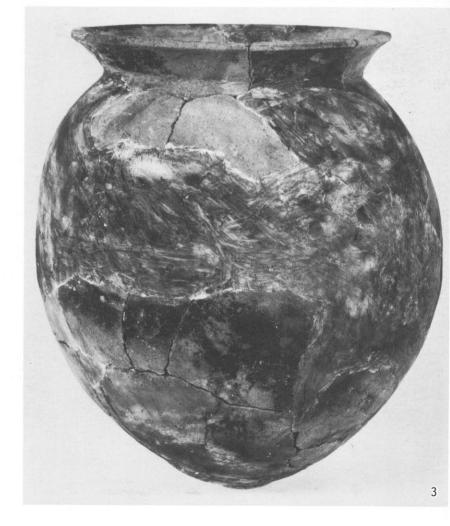


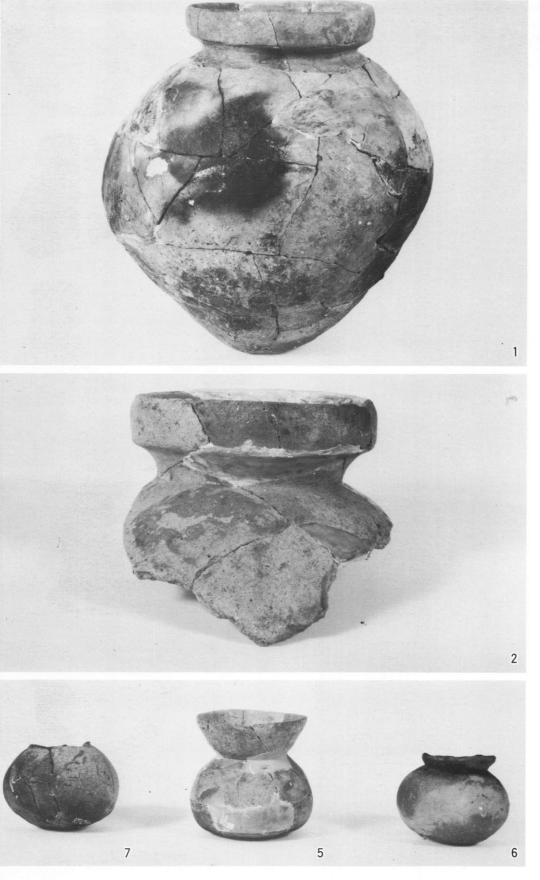
(SD04)



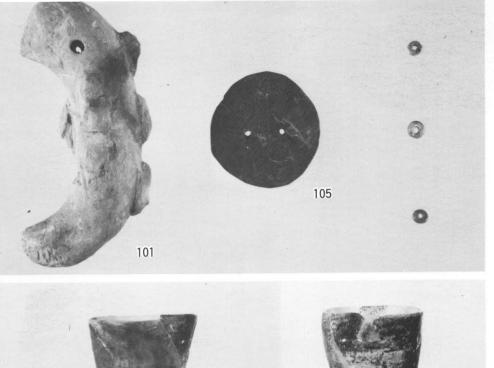


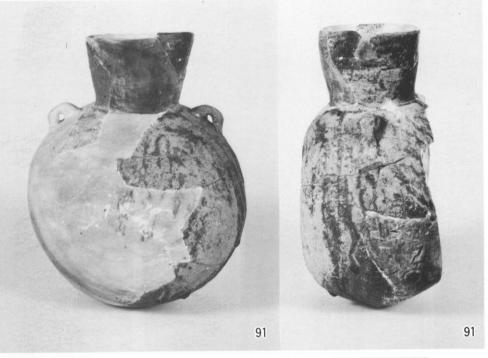




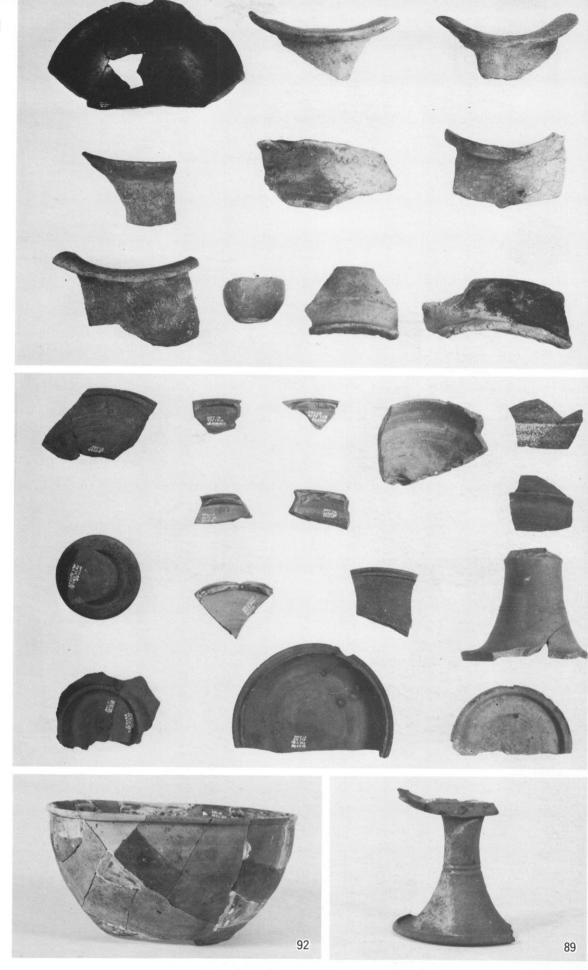


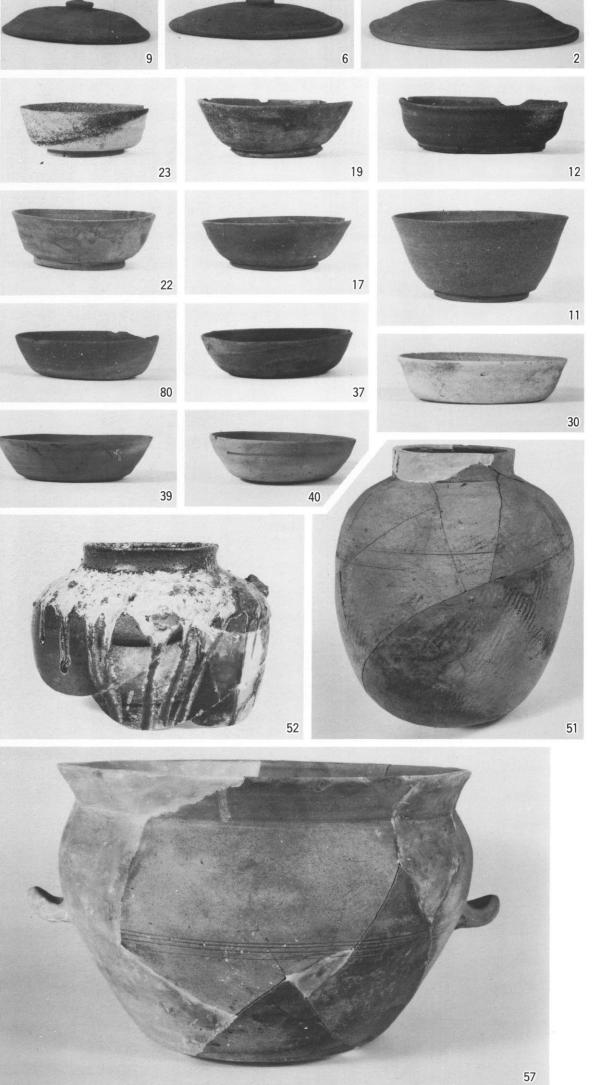








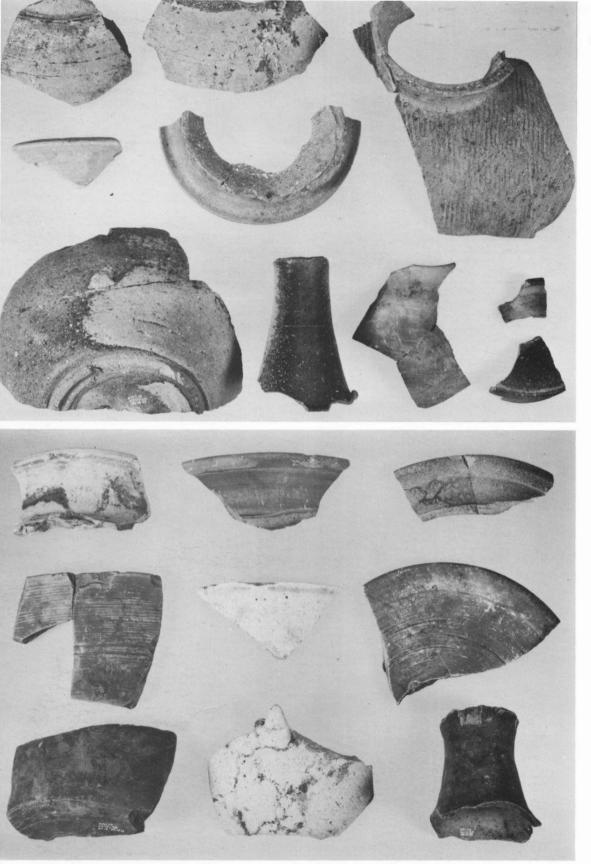


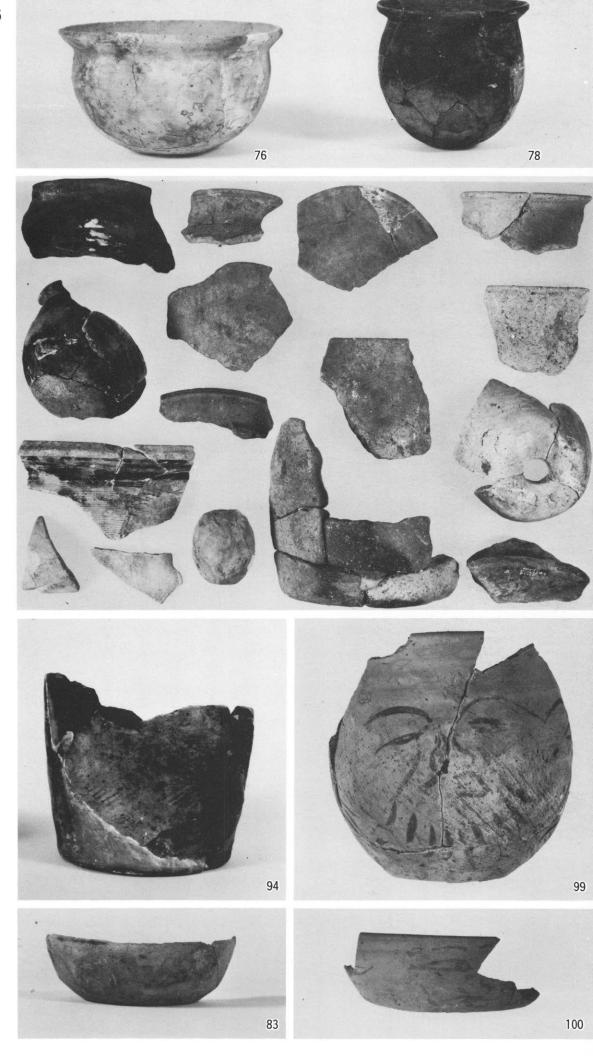


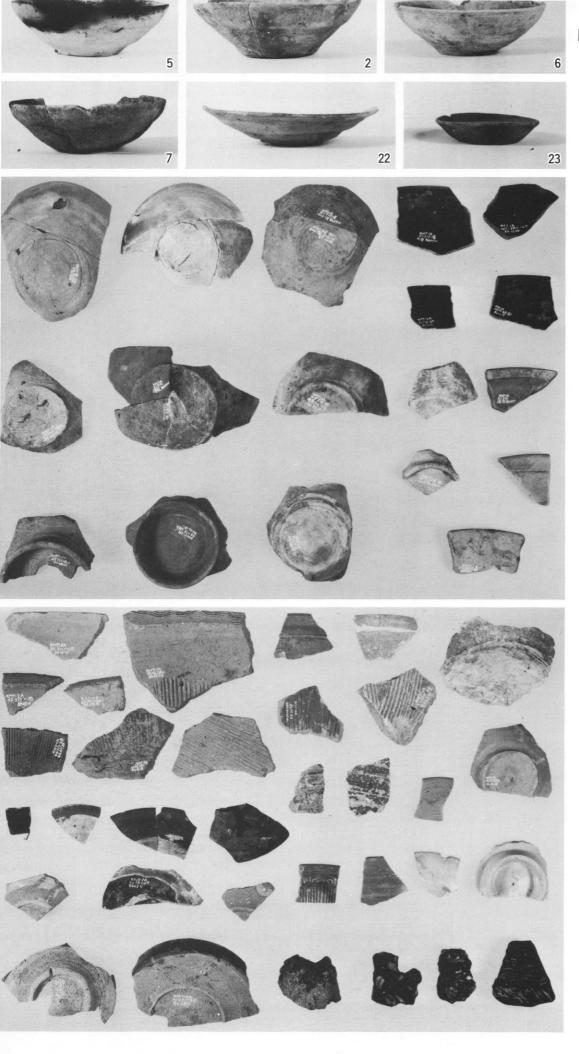


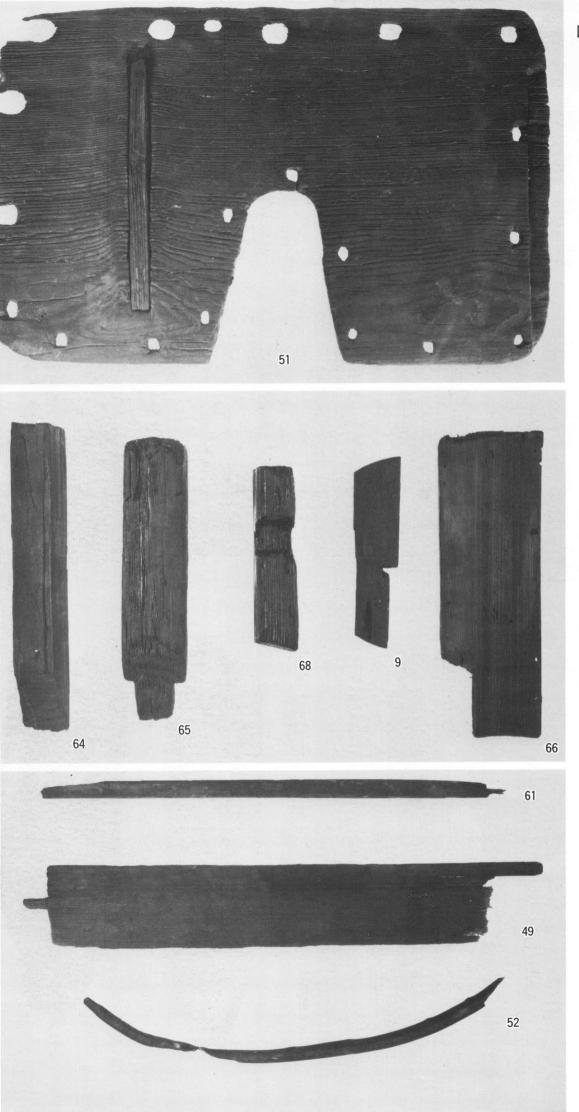


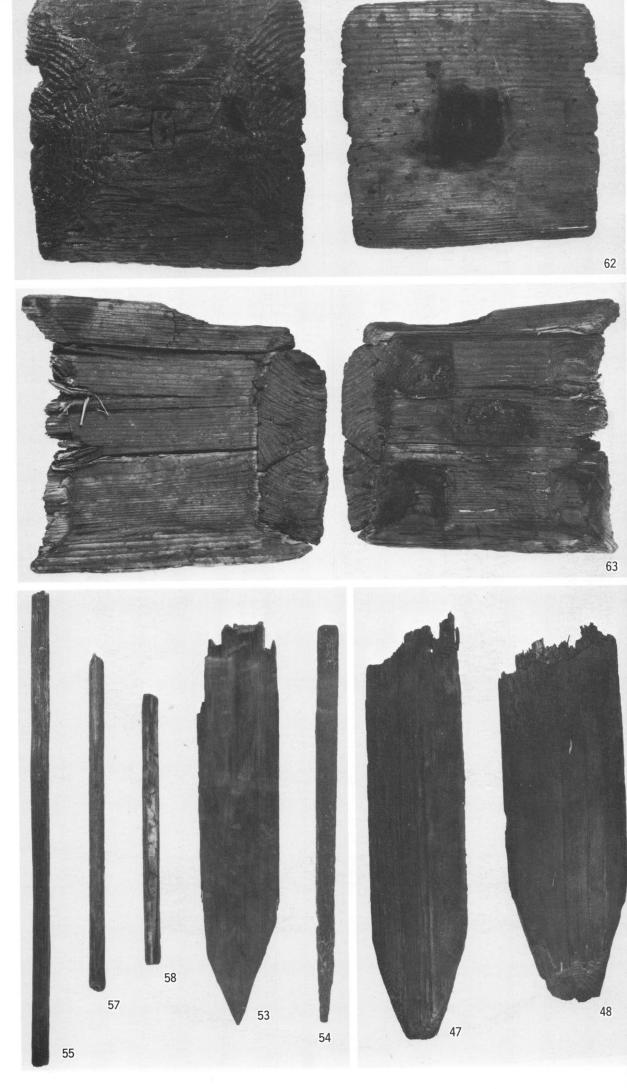












都市計画街路

七美·太閤山·高岡線內遺跡群 発掘調査概要(3)

昭和60年3月30日発行

編集 富山県埋蔵文化財センター 富山市茶屋町206番3号

富山県教育委員会 発 行

中村印刷工業株式会社 印刷